

傾城八花がた

解題

元祿十五年正月二日から初めて大阪の竹本座に上演された。作者は錦文流である。

本曲は五段に分れてゐる。著想平凡、文章も難すべき所往々あつて、名作ではないが、各段の變化に技巧を凝らした錦文流の代表作として挙げた。

底本は善本を得難かつたので十行の丸本に據つた。この丸本は多く平假名書きで讀みにくい爲に、妥當と思ふ漢字を當て、假名遣・句讀も正した。そして國書刊行會本の「傾城八花形」をも参照して、彼の詞章を見るに止めた。

作者

錦文流は大阪の人で、元祿・享保年間に於ける淨瑠璃及び浮世草子の作者である。彼は西鶴の門人で俳名を錦頂子といひ、「熊谷女編笠」の序文に「浪花津俳諧僧錦文流」とある。彼の淨瑠璃作に「本海道虎石」(元祿十二年五)、「國仙野手柄日記」(信濃稼正十三年頃作か)、「傾城八花かた」(元祿十五年正月竹本座上演)、「高名大福帳」(寶永元年竹)、「男色賀茂侍」(寶永三年作か)、「仁徳天皇萬年車」(正徳三年七月豊竹座上演)、「西行法師墨染櫻」(享保二年五月、熊野權理烏牛王)享保四年竹本喜代太)などがある。又浮世草子の作に「棠大門屋鋪」(寶永二)、「風流今兼好」(寶永二)、「當世乙女織」(寶永三)、「熊谷女編笠」(寶永三)、「好色手柄咄」(寶永五)、「草木軍談賤々爪木」(寶永五年刊)、「本朝諸士百家記」(寶永六)、「徒然時世粧」(享保六)がある。そして彼が著述の年から推せば、彼が作者生活は元祿十二年から享保六年の間である。歿年未詳。

登場人物の主なる者

伏屋の叔母(その名を松蟲といふ。五十歳許り) 宇都宮彌三郎友綱(源頼朝の家人) 伏屋(生田川屋の遊女)

瑞龍寺の僧達 塵塚無量の介土塊(友綱の逆臣) 文車兩輪の介道逸(友綱の忠臣)

正木葛の丞末長(友綱の家老職) 末長の妻(二十餘歳) 生田川屋の長(伏屋の抱主)

梗概

正治元年仲秋の頃、京都守護職宇都宮彌三郎友綱は、源頼朝の命を受けて、領地召上げとなつた城戸兵庫守顯高の泉州天の川城を無事に請取つた。そして相思の仲である生田川屋の遊女伏屋と共に駕籠に乗つて、攝州西成郡下難波なる慈雲山瑞龍寺に参詣した。折節五十歳許りの品のよい婦人が、寺内で唐人の畫いた女繪の掛軸を掲げ、香花を手向けて念珠を爪繰り、物思ひありけに經文を讀上げてゐる。友綱之を見て怪しみ、其の婦人に仔細を尋ねた。婦人之に答へて「この掛軸は家傳の物であります、之を賣つて供養料に充て尼となりたう存じます」といふ。友綱之を聞き、其の掛軸を求めようとして、家來の塵塚無量の介に其の繪の筆者を鑑定させた。かねて伏屋に横戀慕してゐる無量の介は、故意に其の繪を難じた。伏屋は之を聞咎めて唐人の筆であると辯じ、友綱に「お求め遊ばせ」と勧めた。友綱は瑞龍寺の僧達に之を諮つて買ひ求めた。かくて伏屋は老婆の素性を尋ねて其の身の上話を聞き、計らずも其の老婆は我が叔母である事を知り、互に抱き附いて奇遇を喜ぶ。友綱も喜び、「伏屋の叔母様でしたか、これは思ひ懸けもない所でお目に懸りました。伏屋は我が妻にしようと思つて存じ、家來の文車兩輪の介に其の身請けの取極めを命じて置いたから、やがてそれを濟して歸つて來るでござらう。叔母様も私が引受けますから御安心なさい」といふ。この時友綱の家老正木葛の丞末長が妻と共に來り、友綱に面會を求めて、「傾城狂ひに御身を持崩されては御家の破滅となりませう。急いで上京なされませ」と、苦り切つて諫めた。友綱赫と怒り、末長に勘當を申し渡した。よつて末長夫妻は悄然として去り、友綱も伏屋等を連れて旅宿に歸る。

文車兩輪の介は伏屋の身請けを濟し、伏屋の抱主生田川屋の長を伴つて旅宿に歸り、相寄つて祝宴を催し、夜更けて各寢所に入る。伏屋と叔母とは久しぶりに逢うた嬉しさに眠られず、阿部野が原に鳴きさかる蟲の音を聞きながら、互に辛かつた昔語り
 に時を過した。折から暮ひ來る蟲の羽風に燈火消え、互に氣疲れてまどろむ。この時叛逆を思ひ立つた塵塚主従の襲撃に遭ひ、
 叔母は槍に刺殺され、伏屋は危難を免かれて大騒ぎとなる。友綱も數多の深手を負ひ、文車に助けられて神宮寺に立退く。文車
 は後に蹈止まつて奮闘し、沸返る風呂湯を敵に浴せて、主君の後を尋ね行く。

◎月野水：古佛心「江湖風月集卷下、松坂の橋州塔の詩句である。月が野中の水に沈み映つてゐる様は、さながら光明の府庫であり、また關が香の山に芳香を放つてゐる様は、さながら古佛の心であるとの意で、橋州（藤原）が作りかけた光明蔵と、また橋州が死んだ後、骨を越の大關山に埋めたによつて、それをいひかけてかくうた。こはここの詩句を用ひて、無量壽佛を讃歌した。

◎精舎 精練行者の所居の義。寺院をいふ。

◎昔の京 難波の京といつて、仁徳天皇の皇居のあつた所。

◎慈雲山瑞龍寺 大阪市東邊區元町二丁目にある禪宗(黃檗)の寺院。俗に龍眼寺と稱し、本尊は賽師如來。本曲には「龍をりんと飼んでゐる。

◎梵閣 佛閣の寺院。

◎明庵 「みやうあん」と讀み、京都總仁寺の開山榮西の字(皇紀一八〇一年に生れ、一八七五年に死す)。

◎沙門 梵語 Samana の音譯、動息の義の僧侶。

傾城八花がた 付り好色八徳一損 第一

月野水に沈む光明藏、蘭春山に吐く古佛心、まことなるかな、一字の精舎を
 眼前の、極樂世界と拜するは、つとめていたる所かな、茲に攝州西成の郡、昔の
 京の跡古りし、下難波といふ片里に、慈雲山瑞龍寺と申す禪林の梵閣あり、抑
 此御寺と申せしは、人の代すでに七十七世、後白河の院の御時、明庵といへる沙
 門、保元・平治に入唐し、仁安の秋歸朝の節、薬師如來を守り奉り、蘭若をしつ
 らひ、引籠り悟りを開き給ひぬる、津の國一の靈場とて、諸人歩みを運ぶなり、
 中にも五十の秋ふけて、つきもけはひもなみくにあらぬと見ゆる女房の、都め

○蘭若 梵語 Aranya の音譯、蘭若の略、蘭華處に譯し、普通に寺院をいふ。

○つき 風つきの風韻。

○莊嚴 おごそかに美しう飾ること。

○正治元年 土御門天皇の御宇、皇紀一八五九年。

○泉州天の川 泉州に天の川といふ所見當らず。

○深見草 牡丹の異稱、この文は深見櫻科なる意にいひ、深見草の雜語「根」につけて、根底即ち心底の意にいうた。

○大衆 法會に集まつてゐる衆僧。

○色繪 女の繪、色は女をいふ。

○御入候 御座候、ござる。

○ぬし 持主。

傾城八花がた

きたる風なるが、唐繪の掛繪を莊嚴し、香花を手向け、讀經の聲もかすかに打しをれ、涙もともに繰りすつる、袂の珠數のかす／＼の、思ひ有る身と打見るにも、あはれさまさる風情なり、頃は正治元年、仲秋下旬のことなりしに、右大將賴朝公の御家人、宇都宮彌三郎友綱京都の守護にて有りけるが、泉州天の川の領主、城戸兵庫守顯高殿中にて口論し、即時に双方討果し、いづれも領地を召上げらる、され共諸家中城に籠り、皆討死と同心し、城を開けざるゆゑんによつて、友綱是を承り、早速城を請取り、歸京に及ぶ、道草の露の間暫し色里の、枕かかぬる添臥や、伏屋といへる酒相手、深くぞ色に染み渡る、はや思ひ川深見草、根から嘘なき實床の、打解けて寝る夜をこめて、日毎／＼の揚げ泊り、今日もかはらぬ連れ駕籠に、法の道にはあらねども、これも御寺に詣でらる、友綱參拜終つてのち、大衆を一人招き寄せ、「拙者は田舎者なるが、御當地一見の爲旅宿を求め、方々の堂舎佛閣残りなく、拜み廻り候、見れば佛前に、似氣なき色繪をかけさせられ、大衆皆々法衣をあらため、御法事の體いぶかしく、如何なる事」と尋ぬれば、「ヲ、御不審御尤、是に御入候は、此掛物のぬし、今日の施主にておは

○楊貴妃 唐の玄宗皇帝の寵姫楊太真。

○虞氏君 楚の項羽の愛妾。虞氏君と楊貴妃とは時代が大違ひである。

○色あらしひ 女ごうしの競争。

○方士 方術の士。道士。蓋し楊貴妃の魂の所在を尋ねたといふ臨邛の方士橋邊園のことであらう。

○安料 安い料金。

○追福の作善 亡者の爲に供養して、消極的善事を實行すること。

○ぐはぎやう 「ぐわんぎやう」丸形の毬であらう。以て算用の意にいへるか。

○朱四 雙六の朱の目の四つが二つ出ること。

○乞目 出さうこひねがふ朱の目。

○朱三 雙六の朱の目の三つが二つ出ること。

せしが、御覽の如く、玄宗皇帝、楊貴妃・虞氏君の二女をあつめ、色あらしひの雙六勝負、即ち筆者方士の由、此施主家傳の形見なるが、取傳ふべき人々も先立ち、空しう成り給ふ、よつて此繪を寶に代へ、安料となし、出家を遂げ、亡き人の菩提をも弔ひたき望みある故、形見の名残も今日斗り、御望みならば繪は賣物、さもなれば、追福の作善をなして行き給へ」と、始終を語れば、友綱も、おはれさ信心膽に銘じ、「扱々殊勝の物語、幸かな 某内々斯様の大掛物、望みに存ずる折なれば、買求め申候べし、即ち某家來に、塵塚無量の介土塊とて、繪を見る者の候へば、鑑定をさせて求むべし」、無量の介は差寄り、「唐繪では候はず、ぐはぎやう寸法あはず、御道具には成がたし」と申上る、友綱聞給ひ、「扱殘念の事共や、シテ寸法合はぬとはいづれの事ぞ」、「さん候、玄宗皇帝は多くの美女を集め給ふ、虞氏君は、楊貴妃の上に立たんとす、又楊貴妃は、虞氏君の下に立たじといさみ給ふ、或時帝寵愛の餘り、賭雙六をはじめ給ふ、いづれなりとも勝ちたらんを、一の后にそなへんと、すでに雙六はじまりぬ、楊貴妃は朱四の乞目、虞氏君は朱三の乞目、双方朱四朱三の乞目、遂に楊貴妃乞目出で、一の后

○五音 音楽の調子。音色(いしほ)。

○律 呂に對し、陽に屬する音調の稱。

○呂 律に對し、陰に屬する音調の稱。

○ぎやへい 「朱四」の支那音 Chu Szu. 「きやへい」はでたらめ。

○ぎやさん 「朱三」の支那音 Chu San. 「きやさん」はでたらめ。

○ぼさん 「ほうさま」(坊様)の號。

○いつかな 如何(いか)いな。

○證據 證據となる形跡。きまり言葉。

○背を打ち 伏屋の背を打ち。

○女中 婦人。(下婢をいふは後世のこと)。

に立ち給ふ、繪に疵ありとはこの事、朱四朱三と唱ふる言葉は、口のすばむ文字成るに、左右共に口開き、寸法相違致せしなり、寸法合はねば、繪といはれじ」と、言葉過ぎてぞ聞えける、友綱今は是非もなく、本意なげにこそ見えにけれ、伏屋も不興を氣の毒がかり、近頃女子の差出過たる事なれど、總じて五音の通ずる事、日本の言葉は、律にかよひ、唐の言葉は呂に通ず、只今塵塚殿の仰上げられ候は、それは和國の言葉なり、唐にてはぎやへいぎやさんと申すととなり、さあさう言うて見さんせ、ぎやへいぎやさんと唱ふれば、口廣がらでかなはぬなり、然れば此繪は唐で、唐の圖を書いた物、ちつとも違ひは候はじ、唐音の義は、ぼさん達よく御存じにてさぶらはん、是非望ましう思されなば、ま一度御吟味遊ばして、此繪ばかりは召しませい、扱美しの顔容や、是はいつかな王様も、迷ひ給ふも道理ぢや、が唐も日本も戀の道、遠いか近いか同じこと、どうで男はいたづらなし」と、賢い事をいふ内にも、夫にすねるあてことが、是傾城の證據なり、友綱悦び背を打ち、「いか様ははさぞあらん、これ〱御出家達、唐音ではさう申すか」とあれば、大衆口を揃へ、「扱々女中に物知りが出ました、法師も及ばぬ及ばぬ」

○申すべし 「申すべきとある所。かかる用法は西鶴の作にもある。

○發明 拾得。りこう。

○悦びえき 分曉。子を産むこと。一人の姉が子を産んで死んだといふのである。

○泣いて別るる烏丸 白氏の「慈鳥夜啼」の詩句に「慈鳥失其母、嗚々吐哀音」とある。これをいひかへ、京都の烏丸にいひつづけた。

○頼む木の下に雨漏る 折角頼みにしたのに其中妻なき意の諷。「太平記」に「頼朝卿飯を押へて、いかにせん頼む陰とて立寄れば、なほ袖ぬらす松の下露」。

○しやうじん 正真。眞の一人者なること。

○木から落ちたる 鹿に「木から落ちた猿」といひ、頼みとする所を失つてせんすべなきに喩よ。

○文選「西都賦」に「猿狖失木」。

○菩提 梵語 Bodhi。正覺なきを譯し、眞如の理を覺り道の極位に到達する聖智をいふ。悟を開いて佛門に歸依すること。

○おろす 制らる。

と、皆同音に寝めにける、友綱施主に向ひ、「扱々大事のお道具を、家來がいはれぬ事を申し、さぞ御心にかけて給はん、價も望みにまかせん」と悦び給へば、かの女、「何しに惜み申す、其上價も望なし、兎も角も御意次第、扱奥様かお妹御か、なう御發明なる御事や」と、しみじみとぞ申さるれ、伏屋も悦び、「率爾なる事ながら、此繪はおまへの親御より傳はる家の重寶か、お國は何國、如何なる故に御出家とは成らせ給ふ」と問ひければ、「よくこそのお尋ねや、もと私は都の者、さる御所方に年月勤めし者なるが、一人の姉も同じ勤め、折柄の御所下り、祇園詣の歸るさを、つい口説かれて假臥の、枕の數も重ねずに、姫御前ひとり悦び、産の上にて相果て候、妾も奉公勤むる身、乳はなし、育てん様もなく、泣いて別る、烏丸、三條下る所へ養子に遣し候が、頼む木のもとに雨漏るとは、此子がことに候ぞや、五つの年の中の冬、彼の養子親、出火のため駈落を致しつゝ、行方もなくなりしとなり、それより方々尋ねれど、死生も知れず候上、斯様に年も寄りつれば、奉公も苦勞なり、一門のゆかりは候はず、しやうじんの私は、木から落ちたるや、世に淺ましき者なる故、是を菩提の種として、髪をもおろし申さ

○なかくの事 さやうのこゝ。お言葉の通り。

○法然上人 名は源空。崇徳天皇長承二年四月美作國久米郡稻岡の莊に生る。九歳の時父を失つて出家し、十八歳の時黒谷に住して叡空の門下となる。爾後經論を研讀し、遂に念佛門に歸して淨土宗を開立した。建暦二年正月二十五日八十歳で大谷の禪房に入寂した。元祿十年勅して圓光大師の諡號を賜ふ。

○親方御連れ下り 生田川屋の主人が伏屋を連れて大阪に下つたといふのである。

んため、此御寺へ駈込みしが、思へば形見の繪もかざり、殊には姉の命日故、心斗りの手向草、哀れと思召せや」とて、又今更の涙なり、伏屋もともに亡き人の、話を聞けば身にこたへ、「世には似た事のありし、昔の母様の名は知らねども、戒名は幼心に覚えしが、若し清光院玄譽心月妙信とは申さずや」、「なかくの事、あの掛物の裏書に、黒谷法然上人の御直筆にて候へ」と、いはせもはてす、「わしこそは其孤子にて候」と、顔と顔とを見合はせ、「此方は叔母御か」、「其方は姪御前」、「ゆかしの叔母御や」、「珍しの姪御前や」と、二人はひしと抱きつき、聲も惜まず泣き居たる、叔母御は涙の下よりも、「斯程に成人することに、何故訪れはし給はぬ」、「如何にも御不審御尤、宜ふ如く、養子親過つて火を出し、大津の浦へ立退きしが、二人は先後に空しく成られ、又孤兒と成りけるを、所の人々不便がり、舞妓といへる憂き節の、勤めする身に成りけるが、此一兩年此方は、親方御連れ下り、馴れぬ氣苦勞致せしなり、命が寶、思はずも初めて御目にかゝる事、冥途にまします母様は、名のみばかりが親子にて、相見る事も候はず、姉妹なれば、叔母様が定めて肖させ給ふべし、今より後は、眞實の親と尊み申さんに、出

○埒して 埒をあけて。始末をつけて。

○魏々堂々 いかめしくしつかりしたさま。

○曲もなや 面白味もないわい。「曲は曲折の義」。

○早打 馬を馳せて急報すること。

家をやめて、此處に足を留めて給はれ」と、又さき立つは涙なり、友綱驚き、手を打つて、「斯かる不思議が世の中に、又有るべき共思はれず、氣遣ひあらねな叔母御前、某定まる妻女なく、宿の妻とも致さんため、文車兩輪の介道逸といふ者を、身請けの爲に遣せしが、定めて埒して歸るべし、然る時んば親子なり、いかでか粗略に存すべき、御身の上は何ごとも、只友綱にまかされよ」と、世に頼母敷仰せらる、然る折節家臣正木葛の丞末長といつし者、妻女諸共供廻り、魏々堂堂たる有様にて、御前に參上す、友綱驚き、「ヤア葛の丞、シテ只今は何の爲、訝しさよ」とありければ、「何の爲とは曲もなや、コレ殿様今度泉州天の川の城、五十三人の連判を取らせ給ひ、城を請取り給ふ段、比類もなき御手柄、禁裡の奏聞録倉の訴へ、早打既に三日半、將軍家の御機嫌、諸家中共に悦んで、御歸京遅しと待つ所に、御病氣の由仰下さる故、此度は末長が、直に迎ひに參りしなり、見奉れば、御顔色殊の外麗しく、二ヶ月餘りの御病氣とは、中々見えさせ給はぬなり、其上目馴れぬ女中様、御席近く候は、御當地の流行病、ム、扱はコリヤ御持病のお傾城氣に候な、コレ殿様、此度天の川の領主、顯高殿身代破却致せしは、大磯

○買論 傾城を買ふについて議論し喧嘩したことをいうたのである。

○推參 無禮。(目録引)

○不調法 疎密。

○諏訪八幡も照覽あれ 諏訪明神八幡様も見をなはし給はれ、決して倒らぬの意で、自誓の詞近松作「百日曾我」に「諏訪八幡も照覽あれ、馬人共に一打ち」と。

○不覺 油断して失策すること。

○女房 末長の女房。主君を諫めるのに女房と連立つてくらは不都合と、主君から見られたので「是皆わたしがわざなれ候」というた。

の宿通ひ、傾城の買論ならずや、よい程で置かせられ、急いで上京なさるべし」と、苦り切つたる有様なり、友綱大きに立腹あり、「ヤア推參なり末長、今度泉州歸るさに、休息の爲此處へ参りしが、誤か、ヤレはこれ友綱が武勇の徳といふ物よ、近頃いらざる諫言だて、向後對面致さじ」と、以ての外に見え給へど、末長猶もとゞまらず、「シテ其武勇に名を發し、宇都宮彌三郎友綱と呼ばれ給ひ、京都の守護職給はつて、御家長久繁昌には、誰がなしたる事ぞ、此末長が忠言は、大殿様がよみがへり仰らるゝと思召し、早々御歸京なさるべし」と、理を盡してぞ諫めける、友綱重ねて、「葛の丞、代々傳はる家老職、大事の番所を打明けて、是迄來る不調法、是より直に立去るべし、諏訪八幡も照覽あれ、再び思ひ返さじ」と、大きに怒つて宣へば、末長驚き、「ハア過つて候、御尤某程の士が、斯うした所へ氣も附かず、浮々と是迄参りし不覺さよ、いづれもおさらば〜」と、悄悄と立出づれば、女房は塵塚が袂を控へ、「是皆わたしがわざなれば、夫の手前も氣の毒なり、只管頼み奉る」と、思ひ入りてぞ嘆かるゝ、塵塚内々根心に、末長無くばと思ふ故、態と色を覺られじと、「お頼みなさるゝ迄もなし、御前を申直

○水の出ばな 一時盛んで、やがて衰へることに喩へる歌。

○みをつくし 湯之串の義。河海中の淺水所に船の邊に得る水路なれる深み(即ち湯)を示す爲に立てる標。大坂市の徽章は湯標である。この文は、荒磯の縁で湯標といひ、湯標に、身を盡して思ひに暮れる意をいひかけた。

○つくく 熟に遠くをいひかけた。

○折 身繕の折紙。

○かはらけ 瓦筒の義。素焼の杯。

○時服 其の時候に著るべき衣服をいひ、春秋二季ならに臣下奴僕等に與へたものである。この文は「重ねて時服をたげれば、生田川屋の長は之を拜領し」の意である。

○禁廷 禁闕。宮中。

さんが、畢竟殿にもいひ懸り、水の出ばなの事なれば、引は返さじ御氣色、追付け御機嫌伺ひて、宜敷申し直すべし、只御心安かれ」と、表面ばかりをあしらへば、とかうの答も荒磯に、立つ甲斐もなきみをつくし、あはれなりける歸るさを、友綱遙に眺めやり、「扱退屈や氣詰りや、いざ旅宿へ」と夕日影、入相の鐘つくづくと、連れて旅宿に歸らるゝ、斯くて友綱旅宿に歸り、京の叔母御の初めてと、饗應残る方もなき折節、文車兩輪の介手を盡したる島臺に、同じく折を取添へて御前に參上し、「是は伏屋殿假の親生田川屋の長、初めての御目見え有難く存するとて、御禮の爲御次迄參上致し候」と、謹んで相述ぶる、友綱悦喜限りなく、御かはらけに相添へ、重ねて時服を拜領し、悦び御前を下りける、友綱兩輪を近く召され、「今日瑞龍寺にて、葛の丞に様々の事有つて、勘當を致せしなり、然れば番所を明くる事、禁廷の聞えも有り、明日上京すべき間、何れも用意致すべし」との御仰せ、兩輪の介驚きて、「代々御家傳の家老職、京都の御遲參悲しみて申し上ぐるは非道ならず、恐れながら、此段は歸參を仰付けられなば然るべけん」と相述ぶれば、「先づ其段は、京著以後宜しく計ひ申すべし、扱叔母御前伏屋事、

○増鏡 眞澄、ますみの鏡。ここの文は、思ひの増すを増鏡にいひかけ、増鏡に映して「鏡り鏡れる」にいひつづけた。

○飛鳥川 大和國高市郡にあつて、山川なれば淵瀬が變り易い。よつて「變り變れる飛鳥川」といひ、「流れの縁語にいひつづけた。

○流れを立つる 遊女を流れの身といひ、遊女の勤めをするを流れを立つるといふ。近松作「傾城酒呑童子」に「息子「むすこ」の太四郎は女房に流れを立てますと、悪名を立てられう」。

○勝間 西成郡の村名で、今は大阪市西成區に入り、南海傳車阪堺線勝間停留場がある。

○阿部野が原 勝間の東にあつて、今大阪市住吉區に入る。昔は松蟲の名所であつて、謡曲「松虫」にも作り込まれ、松虫塚は今も存してゐる。

○汐首 槍の穂先の柄に接した所。

○裏缺く 槍又は矢ノ刀などが突立つて裏まで貫き通す。

○衽 衣服の前の左右にあつて、上は袷(えり)につづき下は袴(つぎ)に至る半幅のきれ。

定めて積る物語、今宵は夜と共語られよ、明けなば伴ひ申さんと、御寝所深く入り給へば、二人はかしこに集ひ寄り、叔母は母御の物語、伏屋は流浪の身、賣られ賣らるゝ悲しさの、わきて思ひの増鏡變り變れる飛鳥川、流れを立つる苦しみや、心配りや氣盡しの、末は涙の雨催ひ、月なき空の雲厚く、残る夕と明けて置く、障子の隙間燈火の、影を慕ひて來る蟲の、おのが羽風影落ちて、燈を打消せば、叔母御前、是々姪御前火が消えた、誰ぞ呼び給へしと有りければ、伏屋枕をもたげつゝ、ニイヤ申し此處は、勝間の里と申して、向うの高みは阿部野が原、近國一の蟲所、火影なければ聲高く、無量の音色聞ゆるなり、音せて聞いてみさんせ」と、東に耳をそばだて、残る辛さの物語、蟲と連れ立つ泣寝入り、更け行く空も松風も、枕に響く胸騒ぎ、あら恐しや天井より、槍先前後に二筋下り、彼方此方とひらめきしが、一つの槍先、叔母御前の肋骨下にぐざと立ち、汐首越して裏缺けば、あつとばかりに息絶ゆる、今一筋の槍先は、伏屋が上著の衽先を貫き、是も疊の裏を缺く、伏屋驚き逃げんとすれば、小袂を引く「ア、悲しや」と逃げも得ず、わな／＼震うて居たりしが、もとより頓智の女にて、帯を解いて上著を

○ごさめれ 「ごさめれ」の約。

○見てげれば 「見てあれは」を當時かくいへる例は他にもある。

○仁王 金剛力士をいひ、寺院の門の兩側に之を安置したものを仁王門といふ。

○家の系圖 宇都宮家の系圖。

○連判狀 城戸頼高の遺臣が泉州天の川城明渡しの連判狀。

○透電 もと奔電を透ふ義で、速力の急なることをいうたのであるが、後にその意を轉じて、出奔、かけおちの意にいふ。

○しちける 白ける。うちあける。西鶴撰「一代女」卷二、諸禮女祐筆の條に「この人にあふ時は更に身を遊女とは思はず打任せて、よろづ白けて物を語りけるに」。

○洒落臭い 生意氣臭い。氣障りな出過ぎめいた。近松作「曾我會釋山」に「やら臭い誰を供に」ミ見え、當時は能く用ひられた一種の流行語である。

捨て、漸う彼處を遁れ出で、事を窺ひ居る所に、何かは知らず槍を傳ひ、人影續いて下り立つたり、伏屋すはやと聲を上げ、「ナウ誰もおはせぬか、盗人ごさめれ、出合ひ給へ」と呼ばれば、友綱文車駈附け給へば、有あふ諸侍は火を點じ、前後左右を取圍めば、たゞ日中の如くなり、人々彼處を見てければ、塵塚主從槍先揃へ、仁王の如く立竝べば、縁の下には一味の輩、我劣らじと詰懸けたり、文車主人に立塞がり、「ヤア狂氣したるか無量の介、ゆるなき人を手に懸けし仔細を語れ」と責めかくれば、「ヲ、不審尤、兩輪の介、某伏屋に心をかけ、度々呼べども出合はず、剩へ身請をせられ、本妻同位に成つたれば、彌無念やむ事なし、時なるかな、家の系圖竝に今度の連判狀、某預り持つたる上、葛の丞は逐電す、今此時こそ折よけれ、主人を殺し、女を奪ひ、我此家を繼がん爲、諸家中大方一味をさせ、今宵の寢込と思ひしに、聞代りしを知らずして、思はぬ不覺を取つてあり、最早しらけた上からは遁れぬ所、覺悟を極め、主人友綱に腹を切らせ、汝も續け」といひければ、文車をかきさ吹出し、「洒落臭い奴がある、己も刀をさす役と、非道ながらもとりかけし志やさしけれども、此文車があらん限りは、

○氣も無い 氣配もない。少しも無い。「いつかなく氣も無い事」とは、どんなに思つても其の望みは、成就する氣配もない事との意。

○出居 客殿又は客室をいふ。「栞窓自語」に「出居といふは簾殿につきて客に出逢ふ所なり、今も東園にて出あふ座敷を出居と唱ふは古風の残れる成べし。」

○花を散らして 審戦するを形容していふ。蓋し生田の森で梶原景季が、梅花の枝を折り旅に挿して審戦した事が有名なので、それからいひ出した詞であらう。

○神宮寺 住吉にあつた寺で、本尊は薬師佛。この寺今は無し。

○物臭い わらしない。「俳言集覽」に「物臭い川柳を云、今又フシヤウと云。」

○物見せん 目に物見せん。

○等活地獄 八大地獄の二で、殺生罪を犯した者この地獄に墮し、獄卒の呵責を受けて殺されては蘇生し、重苦を受ける。詳しくは「往生要集」に見ゆ。

○まつかう 先斯(まあ)か。近松作「女殺油地獄」に「おのれ迄も同じ様に立騒いで何と居る、まつかうするま揃み附く。」この文は、土御門天皇の正治元年頃、文車が熱湯を以て敵を惱ましたことが、誰かの記した物語に見えて、自分の作つたものではないと、誤らしくいうたのである。

いつかなく氣も無い事、ならぬさせぬ」といひ様に、太刀眞向にさしかざし、眞先かくれば友綱も「方々續け」と宣ひて、出居の大庭に下り立ち、花を散らして切結ぶ、され共友綱は、思ひも寄らぬ裏切に、數多の深手を負ひ給ひ、「エ、無念千萬や、これに付けても末長が、我を諫めし言葉の末、其日を越さで友綱が、身に迫りぬる恥かしさ」と、齒齧みをなしておはします所へ、文車取つてかへし、「君は一先神宮寺迄立退き給へ、某御跡防ぐべし、はや疾く」と勧めぬる、是非に及ばず後を見せ、岨傳ひに陰暗き、草葉を分けて落ち給ふ、あひもすかさず前後の武士、一つに成つて取かくる、「いや物臭い奴ばら、いで物見せん」と、大手をひろげ駈廻る、折節宵より焚く風呂の、湯玉たぎつて沸反り、等活地獄の如くなる、小風呂の戸をくわらりと明け、投げ込み又は放り込み、追ひ込み突き込み、押し込んで、「ヲ、大入目出度し、加減はよきか」と、そつと立寄り覗けば、「是なう死にます、助けて」と、小風呂の内を叩くにぞ、「ヲ、く焚くよ、焚きますよ」と、焚き炭薪をくべ、すでに行方もなくなりければ、風呂の内なる者どもは、朱を注ぎたる如くにて、頭かくくよろほひ行く、昔まつかうさる人の、書き傳へたる物語、うつして今に興じけり、

第 二 (塵塚の館。松蟲の住家)

登場人物の主な者

塵塚無量の介土塊(友綱の逆臣)

伏屋

屋(友綱の室)

塵塚無量の介の若侍等

文車兩輪の介道逸(友綱の忠臣)

松蟲(伏屋の叔母)の靈

梗概

塵塚無量の介は主君宇都宮友綱を追拂つて其の跡を纂ひ、驕奢日に超過し、伏屋を一室に幽閉して、己が意に従はせようとして様々に口説いた。然し伏屋は頑として靡かぬ爲、無量の介忿懣し、竹の節を抜いて油を注ぎ込み、猛火の上に渡して橋となし、其の竹に火の附く頃、部下に命じて伏屋を引出し、其の橋を渡らせた。哀れな伏屋は火焰に包まれて苦しみながら、「いかに敵が私をいぢめても、私は友綱様を思ひ切つて他の者に靡くやうな事はしませぬ」と、聲を上げて泣く。無量の介くわつと怒つて若侍に命じ、伏屋を縛して松樹の枝に吊下げさせた。

伏屋は目くるめき息の絶入らうとする時、側なる寶藏の棟の鬼瓦を被つて、姿を晦ましてゐた文車がゆるぎ出て、伏屋の縛繩を切棄てて之を庇ひ、猛然とつつ立ち、鬼瓦を投飛ばして各乗を上げ、「無量の介の馬鹿野郎め、久しう逢はなかつた。汝が奪つた主君の系圖と連判狀とを取戻す爲、寶藏に忍び入つて思ひのままに奪ひ返したが、いつその事に汝が首を刎ねて持歸らうとして、日の暮れるのを待つてゐた所に、計らずも伏屋様をお助け申した事、嘸主君も御満足であらう」と、大音聲を上げて呼ばはつた。無量の介驚き、「系圖や連判狀を奪はれては一大事。者共彼を射取れ」とて、矢繼早に射た。文車はその飛來る矢を叩き落し、屋根瓦を投附けて敵を追散し、伏屋を左手に抱き、竹の端に取附いて塀の外面に飛越えた。そして敵の追ふ道を避けて西山陰を傳ひ、燈火かすかに漏れる一軒屋を求めて宿を乞ひ、伏屋と共に泊る。

其の夜伏屋の夢に麗はしい老女現はれ、「我はそなたの叔母松蟲である。無量の介の槍に刺されて非業の死を遂げ、江口の遊女と生れかはつたが、本地は普賢菩薩、垂迹は尾張國白鳥大明神である」と語り、傾城色遊びの八徳一損を記した一卷を枕元に殘して消えた。伏屋目覺めて之を見れば、其の八徳の主意は、(一)粹人となつて人つきあひがよい。(二)酒宴の席で物馴れてゐる。(三)買日の外に馴染の遊女と戀の面白さ。(四)諸商人の身の上や内證事などは遊女から聞いて知れる。(五)衣服の流行なども知れる。(六)戀を知り情を知り、假名文字を習ひ、諸遊技に通じる。(七)遊女が請出されて人妻となれば、交際上手で利發である。(八)茶屋狂ひをした人は、老いても世間に交はつて若々しく、一生無聊に暮さない。其の損とは、惡洒落仲間には交はつて、揚屋に嫌はれ身代を潰すとあるので、伏屋は有難いと押戴いた。

折柄無量の介の追手數十人押寄せ、危難身に迫る時、白鳥大明神の御靈が白鳥となつて現はれ、羽風凄まじく砂を吹捲り、追手の者共が前後を忘ずる際に、文車・伏屋の兩人は逃れ去る。

評

本曲の題名は、松蟲が殘した一卷に據つたもので、この第二段は蓋し作者の得意な場面であらう。

第二

○君は禮を以て分るるなり 「五子」
妻下篇に君之親臣如手足、則臣視君如腹心、君之親臣如大馬、則臣視君如國人、君之親臣如土芥、則臣視君如強敵。

扱其後、君は禮を以て使ひ、臣は忠を以て君に事ふ、義ある時は君臣となり、義なき時んば、君臣も敵味方と分る、なり、扱も塵塚無量の介、主人友綱を追ひ

○友綱死生知れざる内御預け下さる
友綱の生死が知れぬ間は、その所領などを麻塚無量の介に御預け下さる。

○超過し 十行本「長くはし」である。

○眼に角を立て 怒つた目つきをなし。

○向後 向後我(麻塚)は。

○はやりをの若者 血氣にはやる若者。

○無間 無間地獄。

○叫喚 叫喚地獄。

○阿鼻 阿鼻地獄。

○やうちん 永沈地獄。

○驗生地獄 死相に就いていふ語で、頂から冷えて足に至り、足の底なほ温かであつて、氣盡きるものは地獄の中に生じること。詳しくは「諸經要集」十九に見え、死相の六驗の第五に當る。
○たくれる 捲(ま)くれて轆(り)寄る。

失ひ、上をかすめて奏聞し、鎌倉へ訴ふれば、友綱死生知れざる内御預け下さる條、上使を以て仰付けらるれば、元來思慮なき無量の介、又上もなき身の驕り、日々夜々に超過し、萬の掟公事訴訟、我意にまかせて振舞ひける、中にも奪ひ取り置きぬる伏屋を一間に押込め、さまざま口説き賺すれども、従ふべくも見えざれば、一責め責めて有無のかへしを聞かばやと、庭前の大竹を一丈餘りに切らせつ、節を抜かせて油おし込み、猛火の上に投渡し、煽ぎ立つれば燃え上り、竹に油の乗りし頃、無慘や伏屋に繩を懸け、庭上に引すゑれば、塵塚眼に角を立て、「己れを見初めし此方大分の金を費し、さまざま心を碎きつ、呼べども呼べども出合はず、情なく振舞ふ友綱に、思ひ深くのぼりつめたる故なり、向後さらりと戀をやめ、ふつつと思ひ切る、さりとほ憎き女奴かな、それ〜汝等追上せ、憂目を見せよ」といひければ、早雄の若者ども伏屋を取つて、「橋上を歩め歩め」とさいなみしは、無間・叫喚・阿鼻・永沈、驗生地獄の苦しみも、是にはいかにまざるべき、一足歩めば、足裏の皮もたくれつ肉裂けて、血潮流る、ばかりなり、されども伏屋思ひ切つたる有様にて、橋上半押渡り、につこと笑うて振返

◎心中 性愛に關する眞實の心。

○ふんじがる 勝反(ふんごり)開(はた)かる義
足を踏開いてうしろへ反(そ)る。近松作「頼朝伊豆
日記」に「無體に取つて行くべいと、ふんじがつてぞ
立つたりけり」。

○すつぼり 智力抜けて無きこと。愚鈍。近松
作「天鼓」に「やい字治太郎のすつぼりめ」。

○文車兩輪の介道逸 「我は文車兩輪の介道
逸なるぞ」の意。

○ばひ返し 奪(う)ほひ返し。

○三種 系圖、連判狀、首。

傾城八花がた

り、「敵ながらもやさしさよ、思ひの切なる形をつくり、報をかへす身の責具、扱
扱思ひといふ物も、餘程辛い物なるが、わたしが見する心中の二字に比へ見た時
は、遙に劣りて覺ゆるなり、友綱様を差置きて外の色にはうつまぬ」と、聲を上
げてぞ泣き居たる、「それく向うなる松の梢に吊上げよ」と、大きにせいて腕く
にぞ、ありあふ家中の若侍、不便の事とは思へども、縛め強く締め直し、繩の
端をば梢にかけ、エイヤ〜と引上ぐれば、伏屋はいとゞ目くるめき、次第次
第に息切れて、既に斯うよと見えける時、不思議や傍なる寶藏の瓦、苦むす鬼瓦
鬼神の如くすつくと立ち、伏屋を圍ひ繩切捨て、ふんじがつたる有様は、勢勝
れて恐しく、有あふ者共驚き騒ぎ、「是は如何なる事なるぞや、末代末世に及べど
も、鬼瓦の化けたる事、眼前見たる初めぞや、是は不思議」と見る所に、被ぎし
瓦を取つて捨て、「ヤレうつそりのすつぼりめ、文車兩輪の介道逸、うしいナア無
量の介、去る頃己れめに、御家の系圖竝に連判狀謀り取られし無念さに、御藏
へ忍び入り、思ひの儘にはひ返し、立歸らんと思ひしが、とてもの事に己れ奴が
首を刎ねて、三種とも主君に渡し申さんと、暮るゝを待つて入る所に、思ひも寄ら

○しやつ そやつ。其の奴。

○留めん 討留めよう。

○打物 太刀薙刀の類。打ち鍛へて作るよりいふ。「案の内」にいひかく。

○よぎつて 通過して。

○妹背鶉 鶉の背つがひ。俗語にも「胸栗穂に妻思ひなさいよ。この文は、友綱、伏屋を妹背鶉に譬へ、伏屋が友綱に別れたのを「片翼」といひなした。

○小幡の里へ馬遣ろ…恐しく 「拾遺集」卷十九、雑戀の部、人麿の題知らずの歌に「山科の木幡の里に馬はあれど、かちよりぞくる君を思へば。」馬遣ろ」とは、馬を遣りませうの意で、馬方が客を呼ぶ詞。

ぬ主君の妻女、某が手に入ること嬉しいと申さうか、主人も悦び給ふべし、塵塚驚き、方々は此二色を奪はれては、後日の詮議むづかし、何卒しやつ奴を打殺し、系圖も状も取返せ、假令鬼神なればとて、一人を留めんこと、案の打物迄もなし、それく射取れ」と矢先を揃へ、雨の如くに射懸ければ、道逸前後に眼を配り、伏屋を後に圍ひつゝ、風をよぎつて飛び来る矢を切つて落す、矢盡れば多くの武士、たとひ文車なればとて、翼なれば天へも行かじ、下りんす所を突き殺せ」と、互に力を合はせつゝ、目をも放さず待ちかゝる、よき時分ぞと文車は、「御待ち久しう候はんに、よくこそよく嬉しけれ」と、焼き加減よき瓦器にて候へば、少々贈り参らす」と、投げかけく、はらりくと打ちかゝるは、霜の枯野に、木枯の誘ふが如く、見えにけり、文車時分は今こそと、伏屋を左手にしかと抱き、右手にて竹の末を取り、南無八幡と觀念し、扉の外へ飛び越したは、人間業とは見えざりき、塵塚驚き、如何にしやつ奴を生けては身の大事、出口出口へ手分けをなし、跡を慕ひて馳せ廻る、妹背鶉の片翼、逢はで焦る、身の行方、小幡の里へ馬遣ろと、いへどそれさへ恐しく、今は杖も力にも、唯文車にたすけ

○片輪車 かたは(不共)に肩車をいひかけた。
また兩輪の介の縁語。

○落ち 逃げ。

○敵に従へば この山里も敵に従つてゐるから。

られ、肩にかゝれば我はたゞ、片輪車の生甲斐も、泣くより外の事ぞなき、されども道逸頼母しく、伏屋を背にかき抱き、「必ず氣遣ひ遊ばすな、兩輪の介が附添へば、片輪にもせず、我君に程なく逢はせ奉らん、さて斯く某道をかへ、本街道へ出でずして西山陰にかゝりしは、さんぬる勝間の落ち足に、君は住吉神宮寺に待たせ給へと約束し、御跡慕ひ候に、はや神宮寺にまします、さては御手の養生に、御知行所の事なれば、若しも此山里へ忍ばせ給ふこともやと、それ故道をかへけるが、今は敵に従へば、疎忽に尋ねられもせず、ハテ何處がなナア、幸ひの寺でも庵でも候へかし、暫しの間宿借りて、御惱みをもたすけつゝ、又いづ方へも立退きて、忍びくゞに我君の、御隠家を尋ね參らせ、何卒逢はせ奉らん、たゞ御心安かれ」と、夕闇暗きまがひ道、宮とも寺とも知れざるに、燈火かすかに影見ゆる、文車嬉しく立寄りて、「少し御内へ物申さん、是は行暮れたる旅の者、憚りながら少しの内、養生せさせ給はれ」と、小聲になつて訪るれば、「何と行暮れたる旅人なるが、病苦切なる人を連れ、一夜の宿と宣ふは、げにいとほしき御事や、いかでか惜み申すべし、はや此方へ」と請じける、文車悦び、「忝

○かいとり 種取(かいとり)。著物の裾又はつままきを取上けてかかけ。

○江口の君 江口の遊女をいふ。諸曲「江口に、江口の遊女が西行法師と歌を詠みかはした後に、普賢菩薩となつて西の空に去つたといふ。この文はそれに據つた。江口は西成郡江口の里をいひ、今大阪市西成區に入る。

○生來し 生れ來り。(或は請來しか)。

○本地 垂迹に對する語で、佛が本有の妙理に契合せる眞實究竟の地位をいふ。

○普賢菩薩 大智あつて常に佛に隨つて學び、衆生に應じて化し給ふ菩薩で、多くは白象に乗る。

○垂迹 衆生化益の爲に種々に形相を顯現して、化を垂れ給ふ佛のはらひをいふ。

○白鳥大明神 熱田神宮相殿をいひ、日本武尊を祀る。古傳に尊は白鳥に化して飛去り給うたといふによつて、この稱がある。この文は、普賢菩薩となつて飛去つたといふ縁によつてかくいふ。

○煩惱ももとは菩提 一切衆生を惱ます迷妄、これを煩惱といひ、煩惱を斷絶して道の至極に證悟到達する聖智、これを菩提といふ。煩惱と菩提とは正反對の知りたせも、本體よりいへば蓋も區別なく、煩惱ももとは菩提であるとの意。「摩訶止觀」に「煩惱即菩提」。

○皆にかかるとは菩提 一切衆生を惱ます迷妄、これを煩惱といひ、煩惱を斷絶して道の至極に證悟到達する聖智、これを菩提といふ。

○頓智種智 頓智とは臨終に出る智をいひ、種智とは佛智即ち無上正智をいふ。

○過不及、論語「先進論」に子曰、過猶不及。

し、然らば暫し臥せさせて賜べ」と、伏屋を下し奉る、疲れ果てけん假枕、うつ

つにあらぬ夢心、然るにありつる老女の形、麗はしかりつる姿となり、衣をか

とり、枕を抑へ、「我はそもコレそなたが叔母、無量の介が槍先に、露の命をと

れたる松虫が亡き靈なり、我此國に江口の君と生來し、君傾城の守りと成る、本

地は普賢菩薩にて垂迹は尾張の國白鳥の大明神、ありし昔の物語、いでく傾城

色遊びに、八徳一損あることを、傳へて世々に廣めん」と、不思議や現の筆の跡、

與へ給ふぞ奇妙なる、「昔々は妹背ごと、親同胞の名附くる迄、色といふ字を知

らざれば、人間の智慧づく事、二十歳を超せども愚にて、世渡りの道孝の道、後

世の道なほ疎かりき、煩惱ももとは菩提ぞと、我皆にかゝりしより、始めて此

道廣めつ、頓智種智のものと、なす、しかはあれど此道の、過不及なるを知らざ

れば、家を失ひ其身を亡し、駈落又は心中の仲立となる悲しさに、我慈悲心の涙

をそ、ぎ、姪御方便の筆を染め、此一巻を殘し置く、名附けて傾城やつはながた、

即ち八徳一損の其品々を分つなり、是を見是を知る時は、惑はず泥ます粹となる、

先第一は人に採まれ、座配品よくきればなれ、しやんとしてさて凜として、そし

度を過ぎた行も、又常軌に達せぬ行も、共に中正を得ぬ故に道に合はない。

○心中 情死。

○姫御方便 「方便」は佛典の語に據つたもので、姫御に色道を悟らす手段といふ程の意にうたうた。

○座配 挨拶や身振などの所作しよまをいふ。

應對の座に於ける所作。近松作「堀川波鼓」に「挨拶おはいししこも物案かできつとして」。

○きれはなれ 切れ離れよとの意。物事に執着しないで思ひ切りよく。

○かけずさはらず 當らずさはらず。無道作に。

○物ごし 物趣物を隔てたこゝに閉える音聲の響。音聲をいふ。「様調菜」に「ものごし」人の聲をいへり。

○間 他の者同士が酒を飲合つてゐる間に入つて、盃を受けて又差すこと。

○押 杯を受けること。

○勇士の交はり 酒大將 諸曲羅生門に「勇士つばものしの交はり、頼みある中の酒宴かな」。

○買日 傾城を掲げて遊興する日。

○戀の重荷 戀慕の情切で堪へ難く思ふこと。近松作「關八州醫局」に「武士の月胡蝶は負ひもせて、戀の重荷に頼平の」。

○かたかゆる 重荷を擔つて肩を代へるに、方變へて出で行くをいひかけた。

て心の角とれて、かけずさはらすうけながす、水の流れのさつぱりと、言葉涼し

き挨拶の、物ごし派手に男子御を磨くは、廊の水ぞかし、第二番には、酒相も上

戸は更なり、下戸とても座馴れ席馴れ、上手となる、酒宴の間をも合はせつゝ、

間の押の又間も、つぎめかはりにさはりなく、つゝとさしもの勇士の交はりし、

頼みある中の酒大將、扱第三は、買日の外假枕の私言、然も誓文寝姿のかたにく

ひつく戀の重荷、又かたかゆる別れしな、餘の色里にないことよ、第四には、

諸商人の身の上見聞く事、是第一の肝要なり、賣懸け又は預け銀思ひの外に搦あ

る事、先の手見えぬ暗事に、とんと陥るが憂世、川底の知りたき事あらば、彼の

敵の行く色宿に便りて、鹿戀の女郎を話し、心をつけて伺ふべし、その大盡のし

こなしにて、明さ暗さの見ゆること、闇夜に燈火得たるが如し、是調法の軍法、

○しな 扱場は、「行きしな」「歸りしな」などいふ「しな」に同じ。「萬葉集」卷十四、東歌に「阿抱思太毛あほしなむ」云々

とある。「思太」しなも、「しな」と同義語である。

○餘の色里に無いことよ 買日の外にかやうな事ができるのは、足繁く遊ぶ遊女屋で馴染の遊女となし得られること

で、餘所の色里では無いことよの意。

○川底 「陥る」の縁で川底にいひ、心の陥奥・内證の意にい

うた。

○敵 お敵。敵は匹敵の意。相方。遊女ながら相手の客をいひ、又客から己が相手の遊女をさしていふ。

○鹿戀 遊女の位。最上位の遊女を太夫といひ、その次を天神といひ、天神の次を鹿戀といふ。

○大盡 傾城買の上客をいふ。

○至り 至り盡せること。行届いて申し分なきこと。

○これよりぞ物のあはれは知るぞかし
「長秋詠藻中、藤原俊成の歌に「戀せずは人は心もなからまし物のあはれも是よりぞ知る」。

○糸竹 糸は三絛、竹は笛の類。管絃。

○しら菊 白菊で、菊の會をいふか。

○善惡の沙汰七十五日 善惡の人の噂も、二ヶ月半も経ればおのづから消滅するの意。諺に「人の噂も七十五日」。

○たんのう 「たんぬ(足)が轉じて「足」たんのしとなり、「たんのう」と延びた轉成名詞である。満足。

○利發 利口發明。賢いこと。

○傾國 美人をいふ。又以て遊女をいふ。「漢書」外戚傳に「北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。

○わるごう 「わるご(悪事)である。關西地方で、子供が仕事など手傳つて邪魔をすることを「わるごをする」といふ。「手ごしも」「手ご」の轉である。わるてんごう。いたづら(惡戯)。

○よね 色茶屋の勤め女郎ち遊女。蓋し遊女の顔容が善醜の如く美しいといふ意より、遊女を善醜と異稱し、また米を善醜と異稱するより、遊女を「よね(米)というたのであらう」よねを打込みとは遊女をいひこめる意。

○いぢる ながぶ。

○になひ 女郎の掙代を負擔し。

商人の功名なり、さて又人の顔容、鏡に向ひ直すが如し、此艶里に入りそむる、

衣の模様も風俗も、長き下著の思ひつき、腰の廻りの物好きも、下卑す愚ならず

俗ならず、一興あつて至りあり、當世男と指折の、五番と下らぬ面影と、譽をと

るも徳分の、第六番は、是よりぞ物のあはれは知るぞかし、戀と情は仁義の二つ、

身の一藝は文の道、假名美しう書きなして、言の葉綴る糸竹や、しら菊茶の湯香

の道、萬の藝能嗜むも、廓通ひの餘情より、つゞまる所は徳となる、第七番は、

請出し本妻に直すこと、素人の知らぬ勝手なり、善惡の沙汰七十五日、親兄弟の

憎みをうけ、一家の浪人、交際の誹りを受くるやうなれど、年月數多の客に擦れ、

無理な口舌もしなをつけ、わけよく捌く心から、姑小舅懐くること、内外の下人

下女迄に、言葉優しくたんのうさせ、夫の友を大切に、世帯の始末抜目なく、恪

氣もせねど自ら、夫を出さぬ仕かけごと、是皆利發の徳をかし、第八徳は若き時、

傾國に立寄る人、老いても世間に交はりて、心古びず、俛も變らで一生徒然なく、

これ存命の徳なりき、扱一損は、悪洒落やわるごう仲間などとして、よねを打ち

こみ、幫間をいぢり、少しの事に揚屋を替へ、無益の女郎をになひつ、引舟禿

禿

○引舟 太夫(最上位の遊女)に附随する船艙(かこじ)(その條を見よ)女郎をいふ。蓋し太夫大船に喰へ、大船の引つれる舟(さいふ)といふ義よりの名である。

に引ずられ、本名呼ばれ恥をかく、後にはよねも揚屋も嫌ひ、工面ごかしに大方は、これより身代歪みつ、遂には家を持ち崩す、これは損にあらざるや、後代、傾城八花形、これを寫して色人の手本にせよ」と、一筆を枕に残させ給ひけり、

○禿 十行本の丸本に「かづら」とある。「かぶろ」とは遊女に事つかへてその見習をする少女をいひ、將來遊女となるもの。

○本名呼ばれ 遊女屋では客を特名で呼び、その本名で呼ぶのは素人客としてあしからずである。

彼所を見れば、一卷の傳書あり、「こは有難し」と押戴き、既に彼所を立つ所に、

○傾城八花形 傾城に交はり八徳を習得して人氣よい若手となる意で、本曲の題名これら出づ。

追手の侍數十人「あますな」と、すでに危く見えける時、白鳥の明神の御影を現はし、枯木を吹き折り砂を捲き、土を覆しぬる有様は、恐しかりける 神祟り、追

○色人 なまめかしく美しい人。近松作「十二段」に「八重九重の色人は、物見くをさしのぞき。諸曲「羽衣」に「その名も月の色人は、三五夜中の空に又、満願真如の影となり」。

手の武士前後を忘するその隙に、二人は遁れ失せてけり、なほ治まりし松杉も、

○松杉 神社の森の意に、松は松平(徳川)をきかせ、「杉」直と同一頭韻語にいひつけて文を飾つた。

直なる御代のすがたかな、

第三 (末長の宅住居。新町の遊廓。)

登場人物の主なる者

- 正木葛の丞末長(浪人)
- 泉 川(浪屋の太夫。末長の妻。二十餘歳)
- 彌 太 八(口入業。悪漢)
- 浪屋の長(遊女屋の亭主)
- 小 春(末長の幼女)

傾城八花がた

小紅屋源十郎(吳服所の主人)

末長の近隣の女房お虎等の三人、子供等大勢

梗概

正木葛の丞末長は、瑞龍寺で主君宇都宮友綱を直諫して怒に觸れ、浪人となつて妻子を連れ、大阪の裏借屋に隠れてゐたが生
活に窮し、愛兒小春を遊女屋に賣らうとして、口入業彌太八に其の周旋を依頼した。そこで彌太八は遊女屋の亭主浪屋の長を伴
うて末長の宅を訪うた。折節末長は眼病治療の爲に眼醫者の所に行つた後なので、末長の妻が應對して小春を見せた。浪屋の長
は幼女よりも末長の妻の美貌に望みを懸け、彌太八の耳に口を寄せ、「娘を買ふなら十兩だが、若し彼の女を買はれるなら六ヶ
年契約で百兩。其方へも世話料として二十兩を渡さう程に、周旋してくれまいか」と、いへば彌太八、「承知しました。萬事は拙
者にお任せ下さい」と、答へて百兩を預り、末長の歸るを待つた。末長は貧苦に賣れた姿も哀れに、眼を病み竹の杖で道を探り
ながら、物思ひに暮れて歸る。彌太八聲を掛け、「かねてお頼みになつてゐるお娘の身賣りに付き、お内儀に申してゐた通り、方
方を問合はせ漸く廓に抱へたい者があつて同道して來た。禿の間は捨てにして、それから六年契約、金拾兩で御得心か」と、言
はれて末長、「お世話になりました。妻がそれに同意しますなら、何分宜しくお頼み申します」と、答へて首を垂れ、愛兒を賣ら
ねばならぬ身の不遇を悲んで暗涙に咽んだ。彌太八「然らば拾兩の内一割は世話料として戴きます」とて、九兩を渡し、末長の
妻の身賣りの證文を作つて、「これに判を願ひます」といふ。末長眼は見えず妻は無筆なので、彌太八の言ふが儘に、末長は妻に
印判を取出させて彌太八に渡し、彌太八は之を取つて末長夫妻の名の下に捺印した。其の時末長、「これ／＼彌太八殿、拙者は
眼を病んで見えない故、其の證文を讀んで聞かせて下さい」と、いへば彌太八、「お聞きになるまでもない。一、傾城奉公請狀の
事、一此小春と申す娘。はて其の後は近頃流行る淨瑠璃で語る請狀の文言通り、何の違ひもない」と言ひ捨て、其の證文を浪屋
の長に渡し、「これで濟んだから杯を取交はしたいが、肴があるまいから取つて來る」とて、まんまと九十一兩を著服して家を出
た。折柄浪屋の長の手代が駕籠を釣らせて迎へに來た。浪屋の長は末長の妻を其の駕籠に入れようとするので、末長驚き、「身

賣りをさせたのは娘小春であつて、妻では無い」と怒り、妻も乗るを拒めば、浪屋の長は、「既に百兩を渡して、お内儀身賣りの證文を請取つてゐる。人を騙らうとしても其の手を食ふやうな者ではござらぬ」と、争つて表沙汰となる。町年寄・家主等寄集つて、浪屋の長・末長兩人の陳述を聴き、「彌太八の罪狀明白となつたが、この者は既に失踪した後であり、兩人にも越度がある爲、互の災難と諦めて、年季六年を四年に直したらいかか」と仲裁し、浪屋の長は直ちに之に同意した。末長は無念に思へども、町役人等のいふ所いなみ難く、證文の年季を書替へ、涙に暮れて妻が無筆の理由を述べ、その爲に騙られた事を嘆いた。かくて駕籠に乗せられて行く妻の跡を見送り、彌太八の行方を尋ねて斬棄てようと決意し、愛兒に手を引かれて家出した。其の後末長の居た隣家の女房お虎等の三人が井戸端に集り、己が夫の放埒を罵り合ひ、末長が家出の噂をする。

末長の妻は、浪屋の泉川と呼ばれて太夫となつたが、夫を慕つて狂女となり、さまよひ出でて徒兒等に罵られながら、「數多の子の中に我が子に似た者はないか」と尋ねて泣く。折節水仕男が泉川の狂へる姿を見て之に戯れる。泉川即ち太夫の道中姿や、遊女の品々を長々と話しかけ、夫や愛子を慕つて涙に袖を濡す。浪屋では泉川がゐないので、これを尋ねて漸く見出し、機嫌を取りつつ連れ歸る。

末長は彌太八を討取らうとして家を出たが、其の後眼病も平癒し、妻を慕うて新町に來り、桶職となる。そして軒端で仕事をしてゐる折から、太夫姿の我が妻に遇ふ。されど人目を憚り思ふ事も得言はで別れ、泉川が遊客小紅屋源十郎に揚けられる様子を見て嫉妬に燃えたが、妻の眞實の心を聞いて、共に死なうとし大騒ぎとなる。この時源十郎、「暫くお待ち下され」と聲を掛け、「私は嘗て末長様の御恩を蒙つた者であります。どうぞ御心安かれ」と、慇懃に挨拶し、直ちに泉川を請出して末長に添はせた。

評

忠臣正木葛の丞末長一家が、引續く悪運に咀はれて悲惨を極める。其の中に夫婦愛や報恩の人を織込んで、美しさと果敢なさと頼もしさがある。蓋し本曲中最も見るべき場面であらう。

第三

○船ぎほふ堀江の川 船の多く競ひ清々堀江川。「西遊集」卷二十の歌に「船競ふなぎほ」ふ堀江の川の水際みなぎほに來層きる」つゝ鳴くは都島かも」。

○仁徳天皇十一年：江を掘貫き 「日本書紀」卷十一、仁徳天皇十一年冬十月の條に「掘貫宮北之郊原、引雨水、以入西海、因以號其水曰掘貫江」。

○七座のいちぐら 歌舞伎座・操座合はせて七座の店肆をいふ。「いちぐら」は市座の義、店肆をいふ。

○しらの町 白髪町か。白髪町は今の大阪市新町南通三丁目あたり、白髮橋の北に當る。

○きの通丁 氣の通丁であつて、粹町の意で新町の通りをいふか。

○千草も靡く 「山家鳥龜歌」に「江戸へ江戸へ木草も靡く、江戸には花咲く實もなりて」。

○用意なき身の上 浪人の時の用意をしてゐない無財産の身の上。

○尾羽を枯らす 鷹の尾羽の損じてみすぼらしくなれるより出た諺で、人の奪れて貧相なるをいふ。

○深山木・見る・身 同じ頭音によつた、即ち頭韻法。

○はづかしのもり この文は、「恥かしを歌枕、羽東郎の森」山城國乙訓郡にある）にいひかけ、

船ぎほふ堀江の川と詠みけるは、仁徳天皇十一年、宮外の雨水を西海へ落さ

んと、江を掘貫きて地を均し、町々小路を割付けて、民屋薨を争へば、七座のいち

ぐらしらの町、きの通丁幾筋か、軒を並べて繁昌の、千草も靡く所かな、扱も

忠臣葛の丞、主君の勸氣を蒙りて、瑞龍寺より直様に、親子三人立退き、暫く

塾居してげるが、もとより用意無き身の上、永々の眼病に、尾羽を枯らして深山

木の、見る影もなき身となれど、世につれ立つは、女房の習ひなりとて馴れぬ業、

馴れ馴染なき町家住、それに染まれば、前垂や襷に簞ればづかしの、もりつけご

ろな小娘も、世に従へば是非もなの、つゆをそろゆる母親は、衣搦つらん火焚く

らん、立居せはしき世渡りや、世やの憂き世や世の中や、奉公人の肝煎に、慾と

悪との二筋を、綯交せの彌太八とて、傾國さをく一ばいに、色商の口入有り、

常々彼所に入入りしが、かねくの契約と、きほひか、つて入り來りうな御内

「森」を守りにひかけて、守を附ける齡の程なの意にうた。

○つゆをそろゆる 露は粒銀で、遣算段する意か。

○衣搦つ 「まねた」(衿)で、石の簾などに衣を載せて打つをいふ。

○肝煎 肝煎を入れることで、身を打込んで世話する義であらう。周旋。世話。

○傾國さをく 「傾國」は傾城に同じ。美人の意より遊女をいふ。「漢書」外戚傳に「北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。さきくは茶屋を傾國と御願を合はせる爲にかく言讀したのであらう。そして傾城屋、色茶屋の意にうた。

○口入 周旋人。金銀の貸借、遊女の賣買奉公人などの間に立つて世話する者。

○彼所 萬の丞の宅をさす。

○何のいの 何でもないことよ。

○横槌で庭掃く 頭と柄杓が同じ方向に拂びてゐる槌を横槌といひ、打整に載せて衣を掃つ槌は横槌である。人を尊重にもてなさうとして狼狽するを諷し、槌で庭掃くといふ。この二つをひかけた。

○道具もそろひ 類の道具即ち眼口鼻などのそろつて正し居り場にあるをいふ。

○松の位 太夫をいひ、遊女の最高位。

○手遠い事 何年かの後で間意(「まだら」)い事。

○口を利く はばをきかす。威勢を張る。

○突出し 突出し女郎をいひ、禿(かぶろ)背ちでなく初めて客を取る、即ち初見世の妓をいふ。

儀樣精が出る、御亭主は留守か」といふ、女房何か差置いて、「能う御座んしたなう彌太八殿、成程ぬしは晝前から、眼醫者の方へでござんすが、何の御用」と尋ねれば、「されば内々あの子がこと、方々の檀那衆に話をして見ましたが、茶屋方に何處にも思ふやうな口がない、それ故廊で話したりや、さる檀那衆の見たいて、即ち同道しましたが、留守なら埒が明くまいか」、女房重ねて「なんのいの、まあ見せましてくだんせ、それ〱小春煙草盆、茶釜の下を燻びやるな」と、打盤取置く横槌で、庭掃きまれば、彌太八はやがて表へ走り出で、「御覽じましたか檀那、亭主は留守にて候が、少しも苦しい候はず、其上追付歸るとの御事にて候へば、先かうお通り成されまし、お茶一つ」とぞもてなしける、彼男小聲になり、「是々彌太八先づ待ちや、娘を見たが道具もそろひ、言はう所のない器量極つて松の位、若も太りが出て來たら、何とあらうも知らぬ事、是は手遠い事なれば、飛附く様にも思はぬが、扱あの母親は何と見事な者ではないか、今ごろ廊で口を利く太夫の内には一人もない、世界の美人といふは、アノ女房の事である、さりとては欲しいもの、突出しに出したらば、恐くは一年中、客も缺かせて賣り詰め

○がらり 給金の全額を前渡しするさまをいふ副詞。すつかり。「好色貝合」下に「わけて見よいは、かしらに給銀皆取るをがらりといふなり」。

○年六年 年季を六年間と定めること。

○二杯も三杯も 二握も三握もといふ程の意。

○びつしやり 叩き附けるさま又は叩き潰して動きのそれぬさまにいふ。近松作「山崎與次兵衛壽の門松」に「煙がまちびつしやりと見しらせ」。

○實事 歌舞伎の語で、立役を勤める俳優のしぐさにいひ、眞實の態を演じること。

○耳 金額の意。金額をとりそろへるを「耳を揃へる」といふ。

○ぐわらり 「がらり」である。「がらり」を見よ。すつかり。近松作「骨標崎心中」に「四方八方の首尾はぐわらりと違うてくる」。

○氣を持たず 認みを屬させる。

○切れもかるめも御座らぬ 目方が切れて不足でもなく、軽目でもなく、額高通りちやんとあるの意。

て、金箱積んで見ようもの、コレ彌太八、さあ成らうなら世話を焼け、がらり百兩年六年、そちへの祝儀が二十兩只今出さうが、して見ぬか、如何ぢや〜」と、背中を敲き、そごろにもがいて強ひければ、彌太八元よりも貪慾深く「如何にも如何にも見事なは、近國に隠れなし、ちよつと見に来るばかりさへ、金の二杯も三杯も、遣うて見物する女房、金儲けるは見えた事、さりながら大切な人の女房で候へば、高でならぬは知れた事、然し亭主も浪人で、眼病故にびつしやりと、身代潰れし事なれば、小判を見せて彌太八が、ちよつぱりと實事の工面にかけてやつたらば、行くまいものでも候はず、昔は何でもかでもあれ、當代耳を揃へたる金百兩を、ぐわらりと出して見せたらば、十が九つ九分迄は、コリヤ行きさうなものぢやが」と、氣を持たずれば、「ヤレ男、そちが行かうと睨んだに、何の違ひがあるべきぞ、コレ〜小判百兩は、不勵放さぬ傾城屋、切れもかるめも御座らぬわ、どうぞ小判を見せかけて、手柄に太夫を取つて見しや、祝儀の金は貳拾兩、萬事首尾して後から」と、金渡すれば受取りて、先づ懐にすつと入れ、「諸事は拙者に御任せ、追附け亭主も歸るべし、先づ〜此方へ〜」と、打

○三界に流轉し 三界とは欲界・色界・無色界をいひ、いづれも有漏の迷界である。迷界であるが故に、衆生はここに生かしくして死し、生死輪廻し流轉するをいふ。

○眞如平等の臺 眞如とは吾人の妄想差別の相應しない、永世不變不易の眞理をいひ、よつて之を眞如平等といふ。眞如平等の臺とは眞如平等の境界を臺に喩へていふ。この文は、佛果菩提の境界に至らうとせよと歡願しないので意。

○煩惱の絆に結ばれ 一切衆生は迷妄にほたされ拘束されて、眞如の理を證得されぬをいふ。

○つぎ／＼もなき 「突き突きに」つぎもなきをいひかく「つぎもなき」とは便りもない意。

○おかさま 御母様おおかさまであつて、母を呼ぶ小兒語。以て他人の妻を親しんでいふ。近松作「冥途の飛脚」に出三殿におかさまは無かつたが。

○禿（既出）

○公界 傾城は世の中の種々な人と交はる意より公界人といひ、傾城の勤めを公界の勤めといふ。近松作「曾我屋八景」に「遊君はくがい人、貧しき體は十郎が外間もはづかし」。(傾城の勤めの辛い意で吾海又は苦界とするはいかに)。

○十分一 一割は世話人の手数料。

傾城八花がた

連れ内に入る、月の影と連れ立つ 悲しみの涙、眼に遮つて、思ひのけぶり胸に満つ、熟是を按ずるに、三界に流轉して、猶人間の妄執の、暗れ難き雲の端の、月の御影や明けき、眞如平等の臺に至らんとだにも歎かずして、煩惱の絆に結ばれぬるぞ悲しき、葛の承末は、浪々の身の上に、先つ頃より眼病にて、醫師の許へ通ひつゝ、養生怠りなけれども、何時開くべき身の運も、月日ばかりを數へ來て、頼みがたなく行く道も、杖をやつゝに、つぎ／＼もなき身の程こそ悲しけれ、彌太八立出で、「ヤお歸りか」、「いや珍しの御聲や、シテ只今は何の爲御入りにて候ぞ」、彌太八聞いて、「さればこそ、御頼みなさるゝ事に付、疾くより参りて候なり、扱お嗅様へいふ通、小春事はは方々と賣つて見れども口もなく、やうやう廊に口有つて、どうやら斯うやら賣付けて、禿の内は捨てにして、公界六年金拾兩、是でよいか」といひければ、「先づ以て御世話や、ハテ女房だに合點なら、兎も角もよき様に、御自分頼み存する」といへども、下の心には、唯口惜しと許りにて、心迄くる涙かな、彌太八今は仕濟せしと、金子を數へ、「是拾兩、内壹兩は十分一、只好い中には垣せいちや、後とはいはず取ります」と、又懐へ

○ぬくめ入る 得分とする。

○ぶん 分。親は親判、請人は請人の判と、作法の當ひ分。

○おぢや おいでやれ。ござれ。

○傾城奉公請狀：子供等までもいふ通り 近松作「百日會我」(元禄十年十月上)渡りけいせい請狀の條に「傾城奉公請狀の事、一此渡り申す娘、流れの道に身を沈む、變久四年癸の丑、五月十五夜つき出し女郎云々」とある。この「百日會我」は當時好評を博したものであるから、この文にも「此末は節(淨瑠璃節)附けて」というた。

○いひなぐる 投げるやうに言ふ。言ひすてる。
○手形 傾城奉公の證文。彌太八が奥に行き、涙屋の長に手形を渡したのである。

ぬくめ入れ、扱證文を取出し、「コレ何方にも有る習ひ、作法の通り、親判と請人の判が入る、外ではぶんぶんに請取れど、此方と拙者が中なれば、餘の請人を頼まずに、私が判をつきまして、兩判で事を済します、どれ印判は」といひければ、末長何の心もなく、「それ女房ども、膳棚な神の折敷の二枚目に印判がある、持つておぢや、早う〜」といひけるにぞ、二人の判をぞ出しける、彌太八判を見分けつゝ、面々の名の下に、墨黒々と捺して取る、末長「是々彌太八殿、拙者は眼が不自由なり、女房どもは無筆なり、手形の譯を存せぬが、どの様な事なるぞ、ちよつと聞かせて給はれ」と、證文を差出せば、彌太八ちやくと引取つて、「エ、聞く迄もない事よ、傾城奉公請狀の事、一此小春と申す娘、ハテ此末は節附けて、子供等までもいふ通り、何の違ひが御座らう」と、いひなぐり奥に行き、手形を渡し立歸り、「酒を出さずばなるまいが、何にも肴があるまいの、ヲ、よき事思ひ出したり、北嶋屋か山城屋で、肴を貰うて來う程に、先づ杯を出さしやれ」と、いひ捨て、こそ走りけれ、所へ廊の内よりとて、手代がましき者一人、駕籠を釣らせて「お迎へ」と、奥へ斯くといひ入るれば、浪屋の長立出でて、「迎ひに來た

○興がる 思ひがけぬ意。近松作「心中二枚繪草紙」中之卷に「いづれも性のよい兄貴にて、年寄られた親父の苦勞でらむる言ひければ、それはきようが、今聞いたと、頭をふり顔をしかめける」。

○けんによろもない 無念もないであつて、思ひ懸けも無いの意。「けんによろは、無念を「けんね」「けんによ」「けんによろ」と稱訛した語。

○手が遠い まだ子供だから遊女になるには年數がかかつて間意い。

○突出し (既出)

○はめち はめよう。おどしいれよう。計略におどしいれよう。

傾城八花がた

か、氣が附いた、扱御亭主へは初対面、先づ以て此度は、彌太八が肝煎にて、お内儀の勤め奉公早速埒明き、此方にも満足せり、年の五年や六年の經つは、少しの内ぞかし、無事で奉公勤め、又一處へ寄り給へ、さあ〜太夫駕籠に乗りや、さらば〜と立つ所を、末長「是は」と引留め、「ム、何とおしやる、某が女房を奉公に抱へしとや、それは如何した言分、此方には、娘をば六年切つて金拾兩、内壹兩は十分一、残る九兩を請取つた、浪人の上眼病で、手前何とも成り難く、尤娘は賣つたれども、女房は賣り申さぬ、土を被つて死ねばとて、愛し可愛い女房を、そもやそも勤めをさせて、其金で身命が如何繋がるゝものなるぞ、いやはや興がる一言」と、けんによろもない顔附なり、女郎屋どつかと振坐り、「何とお言やる御浪人、女房は賣らぬとや、尤娘を見せうとて、彌太八が連れ来れども、娘は餘り手が遠い、是は止しにといひければ、然らば内儀といふにより、突出し六年金百兩、證文まで取つたるが、それに言分ありけるか、コレ浪人殿、如何に身代ならぬとて、それは卑怯のなされ様、ム、扱は肝煎彌太八と並び、身共をはめうとや、扱々野太い人がある、コレ此方は年中商賣で、大

○廻す くりあつかふ。きりもりする。

○足下の明い内 日が暮れないで道の見える内の義。手後れならぬ以前の意に喩へいふ。

○いき盗人 盗人の語を強める爲に「生いき」を添へていふ。「生畜生」「生女鬼(いせめらう)」「死畜生(しちくしやう)」「じにたはげなごは、いづれも語彙を強める爲に、「生」又は「死」を添へたものである。

○かどはかす 暴力又は詭計などを用ひて、女子供などを捉へ連れ去る。誘拐す。

○かま 妻をいふ。「俚言集覽」に「笠(かま)妻を笠(かま)云(本朝俚語)笠、東國の俗妻を呼ぶ阿笠(オカマ)云(云)云あり云々」。

○代官所 (見索引)

○泥水呑む 泥水を呑まされ、いため責められて拷問されるをいふ。「假名手本忠臣蔵」第七に「鴨川でナ水舞(みづまひ)を食(くら)はせし」もあるも、鴨川で泥水を呑ませよとの意である。

○年寄 町年寄の略。町内の公用雜事を業る役。

○五人組 五戸を一組とした隣保的治安維持の團結した自治機關である。

○御前 代官所の長官をさす。

○町代 町年寄の代人となつて、町内の公用雜事を業る者。○「年寄」を見よ。

分の金を出し、大勢女郎をまはす身が、其手を食はうと思やるか、足下の明い内、早う渡しや」と引立つるを「何處へ」といひて引戻し、「ナニ拙者が賣らぬ女房を、買うたといふはおのれが騙り、いき盗人の晝強盜、肝煎とうなづき合ひ、女房を勾引し、傾城にして賣らうとは、扱たくんだりく、もう此上は餓死んでも、娘も賣らぬ」と、金投返し、小脇指ひねくり廻し、寄らば突かんず勢なり、女郎屋彌合點せず、「ナ、其方がかまの前でこそ、言ひたい我儘いはれうすれ、證文手形が物を言ふ、御代官所の鏡にかけ、御意次第に仕らう、泥水呑んで渡さうより、内證にて濟されよ、それとても聞入れなくば、明るい所で埒明けん、ソレソレ手代御年寄・家主殿・五人組へも斷れ」と言付け、下部を呼寄せ、「急いで袴を取つて来い、是より直ぐに御前へ行き、たつた今日に物見せん」と、疊を叩いて喚きける所へ、家主・五人組・宿老・町代入り集ひ、「こは何事ぞ、聲高な、兩方共に静まつて、様子を篤と申されよ、仔細を聞かん」と鎮むれば、末長立出で、手を束ね、段々をいひければ、女郎屋は手形を出し、「御覽下され候如く、金子を百兩請取つて、證文を致し置きながら、只今になり、金子をば九兩返して、娘は賣ら

○儀 身賣の儀。

◎太夫 遊女の最上位の者。

◎天神 太夫の次位の遊女。

○園 唐摺りも書き、天神の次位の遊女。(既出)

○端 瑞女郎の略。太夫・天神・園よりも下位の遊女をいひ、店頭に出張つて客を招くによつて見世女郎ともいふ。

ぬ、金は存せぬなどとして、女房が儀を紛らかす、千萬我儘横道者、憚りながら私儀は、御存じの御方もあるん、廓にては隠れもない浪屋の長として、太夫ばかりが十五人、天神・園・端かけて、八十餘人持つたる者、金の五十や百兩で申譯を仕り、人様の目を掠め不埒を申上ぐべきか、斯く御出合の上からは、御代官所も御同然、段々御詮議下さるべし」と、事を分けてぞ申しける、年寄・家主聞届け、「いか様是は尤なり、然し此證文に、請人肝煎綱交せの彌太八と判形あり、此仁は何處にぞ、何とて出合ひ申さぬぞ」、女房「それは先程から、肴の用意に參るとて、疾くより出でられ候」と、是も段々言ひ分くれれば、年寄・家主口を揃へ、「ハテ不屈な男かな、是程の騒動に請人出でぬ事やある、それ／＼宿へ人をやれ、畏つて町代が走れば、跡から夜番が行く、「やれ人賣よ」といふもあり、「喧嘩で斬つた」と沙汰をする、「酒の酔ひちや」と遁ぐるもあり、「強請者ちや」と話すもあり、「やれ心中よ騙よ」と、堀江は喧嘩き渡り合ふ、折節町代立歸り、「彌太八は五七日以前に駈落し、お帳にも留め候として、家は明家で候」と、様子を細しく言ひければ、年寄・家主・五人組、「扱は此肝煎奴が、亭主の眼病幸に、娘が事を種

○料簡 勸辨。

○笑止きょうし 「笑止」は常字で、もとは「勝事」しよろし「」であつて、す々れた事の意から、變つた事、興のさめる事などの意に轉じたのであらう。謡曲「鉢の木」に「あら笑止や、又雪の降り來つて候」。

○もれる 漏れる。決議に加はらぬ意。

○男當つて碎くる浪屋 諺に「男は當つて碎けぢや」といふに據り、當つて碎くる浪を浪屋にいひかけた。この諺の意は、男はなり行きに任せて躊躇しない、物に當る勇氣があるべきなどの意。

○町人 年寄家主五人組の人たち。

○氣の毒 心を苦しめ惱ますこと。我が心の苦痛。氣の毒の反對。(見索引)

にして、騙り居つたに紛れなし、ハテ扱あつかいといし事ぢやなう、然れども、先様さまには慥たしかな證文しょうもん手形てがたあり、と言いうて眼前がんぜん騙かたられしを、如何いかに手形てがたがあればとて、片手かたて打うちにもなりますまい、こゝは兩方折りやうほうれ合あうて、互たがひに料簡りょうけんあらう事こと、扱あつか長殿ちやうだんへ申します、御自分ごじぶんにも大分だいぶんの金子きんぎを出だし抱かへられ、堅かたい證文しょうもんこれあれば、言分いひぶん尤道うどう理りなり、なれども亭主ていしゆは騙かたられて、僅わずか金九兩きんくわう取り、手形てがたの通り奉公ほうこうに出だしませうとも申まうすまじ、いはゞ彌太八やまたはち、長殿ちやうだんを美事みことに騙かたつて取とつたれば、騙かたられ損そんともいふべきが、證文しょうもんといふ物がどうとも削けずられぬ、兎角とかく手形てがたが亭主ていしゆの越度をんど、此言譯このいりわけが立ちにくし、此處こゝをば我々扱あつかはん、手形てがたの年を四年よねんにして、二年にねんは料簡りょうけんなさるべし、亭主ていしゆも笑止きょうしに思おもへども、ハテ騙かたられたる身の因果いんぐわ、四年よねんの年でお内儀ないぎを、長殿方ちやうだんかたへ渡わたされよ、何なんと長殿ちやうだん是これでは」と、何れも舉こつて扱あつかへば、もとより長ちやうは手前まへよし、「何なにが扱あつかお町議ちやうぎをもれませうやうはなし、拙つたけれども私わたしも男おとこ、當あたつて碎くだくる浪屋なみやの長ちやう、何なんの二言にごんと申まうさせう、ハテどうなりともよき様やうに」と、一方いっぽうさらりと埒明らちあけば、町人共ちやうにんども悦よろこびて、「早速さつそくの御得心ごとくしん、先づ以もつて忝かたじけし、是々亭主これこれていしゆ、其方そなたにもさぞ氣きの毒どくに思おもはれん、然れども斯しかうなければ、兎うにも角かくにも濟すまぬなり、

○とよ、「と」は意の切れる所を承ける助詞。「よ」は感動を示す助詞。その間に入る語を略した形であつて、感動を示す一種の語調。謡曲「熊野」に「今ひと度見参らせたくこそ候へまよ」。

○しなしたり しまつたり。しそこなつたり。

○貧は諸道の妨 貧乏は萬事の障礙になることの意の語。この語は「貧我物語」などにも見えてゐる。

○牙を噛む はがみをなす。齒をくひしほる。

此方次第に召されよ」と、又證文を書き直せば、扱ひといひ、差詰めになりていふべき様もなく、是非に及ばず判をつき、女房に打向ひ、「先程より段々の通、お町衆の御意なさるゝも背かれず、其上此方過つて、證文これある事なれば、一つも言分立ち難し、其方も無念にあるべきが、今は逃れぬ所なり、前世の因果と諦めて、年の間は勤めをしや、傾城町の習ひにて、勤めの内はふつつりと門出る事も叶はぬ由、今別れてより、年の内逢ひ見る事はなきぞとよ、互に命ながらへば、廻り逢ふ瀬もあるべきか、知れぬは人の憂き命、いづれが先に立たうやら、頼みがたなき人界なり、思へば是が生別れ、扱ひしたり口惜しや、貧は諸道の妨とは、今身の上知られしな、貧しき故に口惜しや子迄なしたる女房を、傾城町へ賣らうとは夢にも思はざりつるに、是は如何なる報ぞ」と、拳を握り牙を噛み、男泣きにぞ泣き居たる理なるかな、女房は、はつとばかりに胸塞がり、聲も得立てず噎返り、平伏してこそ居たりけれ、末長娘を捲起し、「扱々こゝな子目を覺せ、おうく起きたか、こりや小春、ヤレ其方が母は父が貧乏した故に、騙に逢うて金取られ、其代として傾城に賣られて母は廓へ行く、又逢ふことは不定な

○世 榮えてゐる間をいふ。

○君 遊君。遊女。支那でも王昭君などの妻を君と云うた。「増鏡」にも、橋本の遊女を橋本の君と書いてある。

り、別れも只今なりけるぞ、名残を惜しめ」とありければ、娘は夢ともわきまへず、「こは何事を宣ふぞ、騙が金を取つたりとて、あの母様を傾城に賣いで叶はぬ事なるか、妾が錢が雛様の箱に百よりたんとある、是を返して、母様を止めてたべ」と縋り付き、「母様氣遣ひし給ふな」と、力を附くるしをらしさ、二人は胸に堪へつ、「ヲ、親なればこそ、子なればこそ、年端も行かぬ心から、親を助くる志、ヲ、出来した出来しやつた、愛しい者や」と、父母は娘にひしと抱き付き、聲を上げてぞ泣き居たる、母はあまりの悲しさに、襟掻合はせ髪かきなで、「世が世の時は御家老の奥様、又は姫君と、お乳や乳母にかしづかれ、末々の者どもには、つひに姿も見せぬ身が、かく賤の女となりけるさへ、よにも悲しく思ひしに、故なき者に騙られて、夫にも子にも引分れ、君傾城に賣られつ、諸人に恥を晒さんこと、あるべき事と思はれず、世に神佛は在せぬか、如何なる因果ぞ聞かせてたべ、さりとてはなう末長殿、生きて互に面を晒し、世の嘲りに成らんより、いつそ妾を刺殺し、娘も手につけ、御腹を召されうとは思さずや、世に落魄れば、左程迄心が後れるものなるか、如何なる憂目に逢ふとても、中々動は

○三瀨川 みづせがは 冥途にある瀬頭川には三つ渡場があつて各瀬がある。よつて三瀨川といひ、亡者が冥途で渡る瀬川である。この文は「見つ」を三人の「三つ」をいひかけた。

○過去生々 みづせがは 前世で生れかはり死にかはりした期間をいふ。

致さじ」と、或は怒り、或は諫め、歎き沈むぞ道理なる、末長涙にくれながら、「ヲ、尤也道理也、某も刺殺し切腹致すといふ事は、心附かぬにあらねども、何とも死なれぬ事があり、全くおくれは致さぬが、こゝをば篤つくと聞分けよ、其方が此處に居ながらも、斯く證文したからは、最早浪屋の傾城、然る處を手にかけて殺した時には盜賊よ、殊に某目は見えす、若し爲損するものならば、縛首を刎ねられん、さある時には、盜賊の名を呼ばれんが、如何としても口惜しさに、胸を摩つて控へしなり、此道理を聞分けて、勤に出よ」といひければ、女房驚き、「南無三寶、歎くうちにもよしやよし、叶はぬ時には子を殺し、夫婦諸共刺違へ、共に冥途を三瀨川、手を引合うて渡らんと、辛きうちにも樂しみしに、死ぬるにだにも死なれぬは、過去生々にて、如何なりし悪事を爲したる報ぞ」と、夫の膝に俯伏して、泣入り絶入るばかりなり、ありつる町人女郎屋も、下々駕籠の者迄も、至極の涙を感じつゝ、共に杖をぬらしけり、中にも年寄・家主は、二人が側に差寄つて、「歎きの段察しやられて存すれ共、最早悔みて益もなし、急いで渡し申されよ」と、力を附ければ、末長は、「誠に以て御懇志身に取つて忝し、い

○孫は子よりもかはい、近松作「頼朝伊豆日記」に「孫は子よりもかはいし、世の誰にも申すぞや。」

○右筆 蒔筆とも書く。かきやく。元祿頃は女衾筆の覆板を掲げ、人の鼻女を預り、手習や謡曲を歌へ、又代筆などをした女があつたことは、好色一代女「巻二、又は近松作「福山姥」などにも見えてゐる。

○あたりや 當れや。仕向けよ。

○わやく 「わうわく」(狂惑又は狂惑)の約説であらう。「わや」なども同様の語。むちや。無分別。いたづら。

○雨やさめ 「さめ」といふも雨のこと。小雨を「さめ」、春雨を「はるさめ」といふ類の「さめ」である。「雨やさめ」とは雨の甚しいこと、甚しく流瀉するに喩ふ。そして「さめ」を「さめさめ」(瀟然の意)にいひかけた。「さめ」の文は十行の丸本に「雨せさめ」とある。

かにも渡し申すべし、何とやらん申す程、未練に聞え候へ共、皆様方にもあらう事、姫御前のお子達には、何かの藝は差置いて、先づ手習が第一なり、某が女房は、三歳になりける年、乳房の母におくれ、十一歳迄祖母育ち、孫は子よりも可愛とて寵愛の餘り、手習は必ずさせな、氣が盡きる、物書く事は、右筆をいくらかかへ書かすべし、身の養生が大事ぞと、琵琶・琴・三味線・踊にて、晝夜を暮せしものなれば、物は得書かず、私がかやうに眼病最中なり、手形の文句は斯う斯うといふを誠と心得て、由なき判を致せし故、御苦勞もかけ、私もかやうの難儀を仕る」と、涙と共に女房を、漸としてかき起し、「思ひ切つたぞ女房、かうした義理にせまつては、幾程歎き悲しみても、叶はぬ事を嘆くな」と、様々賺し渡すにぞ、女郎屋手代受取つて、漸く駕籠に昇き乗すれば、女房今は叶はじと、思ひ切れども悲しさの、猶増しくくる憂き涙、止めかねたる風情にて、駕籠の内より差覗き、「これ小春、父様は眼が悪い、明日からは随分と孝行にあたりや、ヤア眼醫者の方へも附いて行きや、かまへてわやく言やんなや、さらば」といふ聲も、跡は涙にかき曇る、時雨の雨やさめくと、小春は泣く泣く走り出で、と

○あんどろ 十行の九本に「行たう」とある。

○下り 文書の雜行。行きやうも、盲目なれば行「ぎやう」のかはる所が知れぬにより、「下りを教へよ」といふのである。

○杖突きの字 「乃字をいひ、字形によつた稱。

○手引草分け 手引して道草を分けるに、ミリ分けの意をいひかく。

○相合井戸 近隣の者の使ふ共同井戸。この文は相合井戸の水は多くの人の姿を映せば、「水鏡映れは」といひ、人々の心の移り變る品々の意にいひかけてつづけた。

○さがなし 善くない。「倭調架」に「さがり日本紀」の字、善の字、性ともに訓ぜり、直をスグとよみ、滑をスガと讀むも皆通ぜり。

かうの事もあらばこそ、「これなう母様々々」と、打伏し歎く其際に、駕籠ははるかに出でて行く、親方歸れば町衆も、つゞいて出でて一禮し、我家々々に歸りけり、跡には親子只二人、惘然として居たりしが、末長涙にくれながら、「さりととは不幸もこの如く、續くものにてありけるか、我長々の眼病も、女房が介抱にて少しは憂さをも忘れつ、夜半の寐覺めの徒然も、語り慰み明かせしに、今日よりしては誰ありて、言問ひかはす友とても、嵐吹き越す荻萩の、おとづれならで」とかき口説き、涙にくれて居られしが、「いや、歎くは愚痴の至り、何分にも彌太八めを、討たでは死しても未來の障り、假令眼は暗くとも、など一念の暗かるべき、娘が眼を借り尋ね行き、出合ひ次第に引括り、女房にも見せ悦ばせ、今の無念を晴らさんと、行燈引寄せ、「こりや小春、父が物をば書くほどに、其方は下りを教へよ」と、筆くひしめす盲人の、杖突きの字も書き交へ、思ふ所存を残し置き、何方ともなく出でて行く、道は娘が手引草、分けて哀れぞ、深かりき、相合井戸の水鏡、移れば變る品々の、あるが浮世の習ひかな、京も田舎も女子どち、寄ればさがなき人ごとや、誇り仲間と名に立てる、隣のや又向ひのが、男噂の

○内儀 人の妻を呼ぶ稱。内方。

○しをたり 「しはたり」(捕垂)であつて、人妻(いりび)じりの意であらう。羞し向きの事に入變り。

○こなり 小形で、なりかたちの意に、いひ、小しは接頭語。

○焚いた 飯などを焚いた。

○まどろむ 目暮むの義。微睡する。

○よい事ありと よい事にして。

○悪性 女狂ひ(色狂)にする者をいふ。

○竹 下女の名。

○高津 今の大阪市南区内。この邊高津神社。生玉神社などあつて遊覧客多く、寛笑婦などもあつて、事件の多かつた所である。

○三界 界限。あたり。三界は多く名詞と複合語となつて用ひ、「江戸三界」「關三界」「他國三界」などいふ。

○長町 大阪日本橋筋に當り、橋から南で二丁目から九丁目までであつた。

○小宿 男女の密會、或は何か用事を辨する人に貸す宿をいひ、元祿頃はこんな戀の仲立をする宿が公然の祕密的に所々にあつた。

○茶筌髪 頭髪を馬天の所で束ね、もこむりを元結で巻き、先をほげさせて茶筌の形にした男子の結髪。

○ごつかり 「ごつかり」といひ、甚しう疲勞した様にいふ。

○手水の湯と諸共に 我は手水の湯と諸共に。

陰口も、もとは思ひの淺からぬ、中にも向ひの御内儀は、釣瓶取る手のなよやかに、「イヤなう二人の聞かしやんせ、まあ此女子といふものは、何がなつたる物ぞいの、朝から晩までしをたりと、成らぬ世帯に身を簞し、今日を今日とも思はねど、男が憎うない故に、よいが上にもどうぞして、兎角こなりのよいやうに、負

けも劣りもせぬ様にと、朝夕焚いた其間に、ちよつとまどろむ隙もなく、洗濯濯ぎに氣を疲し、縫立て仕立て、著せければ、よい事ありと著飾りて、お虎の鼻様

聞かしやんせ、なうこちらの悪性が、昨日もまあある事か、家主殿の竹を連れ、高津三界連れ歩き、長町七丁目竹が小宿で日を暮し、剩へ泊つて来て、今朝明方

に茶筌髪、ごつかりと瘦せての、内へ戻りし其時は、手水の湯と諸共に、くらくら胸が沸返り、物いふまいと思へども、男は七人あてがひぢや、なま中いらぬこ

と云うて、又叩かれては損恥ぢと思ひあきらめ、飯炊いて食はせて寝させて來ました」と、おろく涙せき上げて、睫毛も響む優しさよ、お虎が鼻は打領き、ごど

つこもどこで御座んすぞ、わたしが所のあてなしが、此中はげしからず内をせはつてせたくと、俄いぢると思ひしが、よく聞けば後家狂ひ、いやはやか、

- 男は七人あてがひ 男は七人まで妾をもつてもよいとの意の傍。「晝夜用心記」に「男は七人あてがひとは言はんか」。
- おろ／＼涙 涙の目にうるむこと。「おろおろ」は腫々の義。
- どつこもどこ 何處も同じ。
- あてなし 當無し。無類漢。
- けしからず 異けし／＼くあらずの義。轉じて奇態なる意にいふ。
- せはつて 「忙」せはしがつての約。
- せた／＼ 呼吸烈しくあわて落ちつかぬさま。せか／＼。
- 俄いぢると思ひしが 俄にもあそぶものが出来たと思つたが。
- かかつた事かいの 言葉にかかつた事ではないわいの。
- 振り附ける 灰汁の中に入れて振り立てる。
- 皮後家面 夫(を)をつこより年長の寡婦。夫(を)をつこより妾の年長なる皮女房といひ、二歳長じれば二歳皮であるといふ。「面」つら「は」馬鹿面「つら」(じ)の面「つら」同じ。
- つがもなう 「つながりもなく」の義。縁もなく。わけもなく。
- ちい 乳母をいふ。かた言に「ちい」(乳母)に同じ。「乳母ちい」は乳母の重複した語。
- 尋にや 「尋ねや」の轉訛。
- 手首尾 ぐあひ。てはず。「手首尾惡さうに」

つた事かいの、昨日も日和がよい程に、洗濯をして仕舞はうと、疾うから起きて灰汁焚いて、ふり附けてゐる所へ、なう月々のあてがひを、責附きに來たかどうしたか、皮後家面めが來くさつて、此處らに乳母に行く人は御座んせぬかと、つがもなう尋ねに來たと思はんせ、わたしも、彼奴めがこちのをば、そびきに來たと小腹は立つ、わしもわしとて、爰想もなう、イヤ後家狂ひする男はあれど、乳母ちいに出る人はない、よそを尋にやと言ひければ、どうやら手首尾惡さうに、こそ／＼と歸りしが、色こそ變れ、品こそ變れ、さりとて癩の種ぞいの、此おか様の所のは、若いが奇特なお人ぢやわ、終に何にも聞きませぬ、ハテよい事や」と言ひければ、「苦は色變へるで御座んす、なうわしらは又お二人のが、羨しうてなりませぬ、此方のは年中醫者扱ひ、男持つたと言ふばかり、内のが足らいで外を稼ぐといふ事が、元手がなうて成る事か、わしらはほんに髪のある尼ぢやと思うて下さんせ、ナウそれはさうぢやが、つい爰な浪人殿は、何時の間に宿替があは、手もち無沙汰でまわりわるさうにの意。「櫻陰比事」卷一に「町衆も手首尾惡しく、何卒沙汰なしにこ談合すれば」。

○癩の種 癩に降る種。癩類のもの。

○苦は色變へる 「苦は色變ゆる」松の風「近松作「隣家歌」にも出づ(こ)もいひ、苦は松癩を聞く世捨て人にもあつて、たわ苦の品が變つてゐるばかりで、苦の無い者はないとの意の語。

○新町 大阪新町遊郎。

○女房がよいならば 器量(顔容)のよい女房であるなら。

○笑ひもがるる「笑ふに、辨れる」をいひかく。
○堀江の水に：身なれども 堀江の川水に裾の濡れるを、新町に賣られて濡れ(色情、情慾)の身となるにいひかけ、我は末長の妻として、餘の者には戀の無き身なれども、意。そして戀しきものは、「元の住家の戀しき」にいひつづけた。ここの文は深い妙文である。

○とぼそ 屏(びら)をいふ。「平家物語」灌頂卷小原御幸の條に、「とぼそ」を落ちては月常任の燭を挑む。

○いはけなき をさない。

○わしは勤めを：戻らんす事ぢややら 心中江戸三界の頃に據つた。この頃は「松の落葉」(元禄十七年刊)巻七に見えてゐる。

○胸慾 貪慾の轉。無情。非道。

○笑止 興(き)のさめる(こ)。(既出)

つたやら、貸家札が打つてある、隣が寂しう御座んせうなう、「こゝなおか様長な事、まだ様子をば知らずかいの、大きな騙にあひ給ひ、お内儀様は新町へ、女郎に賣られて行かんして、御亭主は、騙めを何卒尋ね出さんと、小さい娘を引連れて、行方もなう成り給ふ、聞けばいとしやおか様は、廊の勤が悲しいか、氣が違うたと言ひますが、哀れな事ではないかいの」、「こゝなおか様わけもない、それが哀れな事かいの、わしらも女房がよいならば、女郎に賣られて、どうぞして氣の違ふ目にあひたい」と、笑ひもがる、

三五

戀ならば、夜晝此處に通はまし、堀江の水に裾濡れて、我は色なき身なれども、元の住家の戀しきに、夜な／＼毎に通ひ来て、ありし扉を訪るれど、夫も我子もなかりけり、「あら情なの御事」と、涙にくれてゐる所へ、まだいはけなき童ども、「そりや／＼女郎の氣違よ、又こそ來れ、狂はせて笑ふまいか」と手をたゞき、「わしは勤めを何時やめうとも、ま／＼な身なれどこなさんに、逢はうばかりにうかうかと、勤めまするに胸慾な、何時戻らんす事ぢややら、こちや知らぬ笑止、氣違よ、氣違よ、氣違よ、物狂よ」と笑ひけり、狂人なりとて笑ふ子の中にも、

○水仕男 水仕事をする男。處所働きの男。

○お山 上方詞に色茶屋の勤め女(遊女)をお山と云ふ。

○御池通 大阪北堀江にあつて、東西に通じてゐる町。

○山衆 遊女をいふ。「お山」を見よ。

○端 端女郎の略。(既出)。「南の端」は、南堀江あたりの下位の遊女をいふ。

○けら／＼ 聲をたてて嘲り笑ふさま。「俳言集」に「けら／＼笑ふ聲をいふ也」。

○傘をさしかける 太夫の道中には後方から傘をさしかけたものである。

○竹子笠 笏の皮を纏んで造つた笠。

○枴 物を懸けて荷ふ棒。てんびんぼう。

○才覺者 才の働きのある者。智識者。

○松 太夫を松の位と云へば、それをさかした。

○退け襟 襟を首から離し後方に下げて着ること。扱衣紋(ぬきえもん)。

○追風 衣に焚染めた香の風につれて薫り来ること。

我子に似たのはなし、「やれ方々よ、笑はずと教へてくれの、金故に飽かぬ別れを

するぞとよ、哀れと思へ人々」と、又平伏してぞ泣きあたる、折節所の水仕男が、

肩を休めるその際に、狂女が側に立寄りて、「これは見馴れぬお山衆ぢや、此御池

通にては、何屋の誰ぞ」と尋ねれば、「何山衆とは誰が事ぞ、我こそあらぬ浮名立

つ、浪屋の内に隠れもない、泉川といふ太夫さん、ア、太夫さん、ア、慮外なが

ら」と寄り添へば、彼の男可笑がり、「なんの其方が太夫である、何方の南の端で

がな御座らうもの」とせかすれば、「泉けら／＼笑ひして、「ヲ、尤々、いか様太

夫といふ物を、つひしか見たる事あらじ、一期の初の見納めに、道中をして見せ

う、見て置きやいの」と言ひければ、水仕男いよ／＼可笑がり、「太夫が定なら道

中が、一際勝れて見事にある、そんならわしは下男、聽て傘をさしかけませうぞ」

と、竹子笠を枴に懸け、狂女が後にさしかくれば、「さても其方は才覺者、おうお

うそれよ出来ました、惣じて太夫といふ者は、位を取つて松一木、野路に立つた

る如くにて、何處から見ても隠れがない、戀と情の二つ櫛、三つ襲の派手衣装、

退け襟遠き補袖の、追風燻るを斯う掴み、足繰り出して脇目をふらず、向うに人

○戀の海 戀の深く廣きを海に喩へていふ。以下「深き」「海人」「泳ぐ」「底の岩根」「浪」は海の雜語に據つた。そして太夫である我を心から慕ふ男は、私の底意は何を思つてゐるか、浪屋の長に問へ、さすれば知るであらうとの意をきかせた。この所は哀れ深い紗文である。

○引舟 太夫に附隨する馬鹿かこひ女郎をいふ。蓋し太夫を大船に喩へ、大船の引つれる舟といふ義よりの名。

○町の風 遊女風でなくて、町人の妻女風。

○ぼちや 〱 もつれ合ふさまをいふ。くしやくしや。

○越後町 大阪新町遊廓内の町名。

○九軒 九軒町をいひ、大阪新町遊廓内の町名。

○もん日 (見索引)

○貰ひ 招かれて行く約束。或る客に貰はれた遊女が、都合によつて他の客に貰はれること。

○せりふ つめひらき。應對。談判。

○扇屋・折屋・茨木屋・住吉屋 共に新町にあつた有名な遊女屋。

○もだくだ 〱もびやくびや。心に何やかやと思ひますはれるさま。

○太鼓を打つ 刻限を知らせる太鼓の音をいふ。

○辛氣 心のくさくして浮き立たぬこと。

○搦老 禿や遊女の鬘をなし且監督し、又搦屋で諸事の取持ちをする女で、赤前髪をなし腰に鏝や巾着を用してゐた。遣手は帽の利いた遊女の成下つた

が御座らうが、佛が立つてゐさんしよが、微塵もよけずふりかけて、とても濡れたる我戀の海、深き思ひのある男海人、泳ぐ心に誠があらば、底の岩根の我心根を、わきてこぼる、浪に問へ〜、是が太夫の條よ、扱引舟は、女郎より少し風俗品下り、町の風してぼちや〜と、つかみからげを帯でしめ、裾小短にしやん〜と、越後町から九軒へ行き、あちらをしまへば、こちらから、揚屋の三が呼びに来る、そこをばちよつと間に合はせ、宵の口説の言ひ廻し、もん日の約束貰ひの臺詞、扇屋・折屋・茨木屋三所仕舞うて、漸と九軒の中の住吉屋、是を勤めてどうしてと、もだくだ思うて来る所に、自分の戀にべたりと逢ふ、先づいそがしいを差置いて、暗い所で立ちながら、一寸言ひたい事を言ひ、後に太鼓を打つてから、やいの〜と走り行く、是も辛氣な勤めなり、扱これからが搦老の番、その前垂も手拭も、團扇も鏝も巾着も、わしに貸して」と取集め、思ひのまゝに身仕舞ひて、何と搦老に能う似たか、よく似合ふがの、是は又よね引舟に事かはり、只大船を漕ぐ様に、コレこの様にゆらり〜と、跡にさがつて歩むにも、とかく禿が叱りたく、朝から晩まで食たくみ、血の道ばかりを苦に

者のなつたのが多い。

○よね 妓。遊女。既出。

○食たくみ 食ふ事ばかりたくらむこと。

○血の道 血行の不順から起るさいふ婦人病。

○八專 隆慶王子の日から發交の日まで十二日間の中、同氣の相重なる八日を八專といひ、同氣の相重ならぬ四日を間日(まひ)といふ。八事は一年に六座あつて、此の期間は曇天陰雨が多い。この期間は晴陽(はる)によつて、「額に石臼(いしうす)切るやうな」といひつづけた。蓋し秀老は聲面をしてゐるのが多いから、それをきかせて、斯くいうたのであらう。

○もんさく 文作。即座に可笑しみある文句を作ること。滑稽な即席文。

○醜(しづ) 服臭の意であらう。

○天竺様 「てんつる／＼」から同じ頭音讀(てんじやく)様とつづけた。水仕男の文作であるから「天竺様」をかく間違つたのである。

○いそ 「いそそ」を「いそ」といひ、磯をきかせて「西の海」の語を呼び起したのか。そして「淡香」の「以藻測(いそ)海」の義に據つた。

○西の海 厄拂の終りの文句に「西の海へさらり／＼」などいふ、その語に據つた。

持つて、どうやら今日は曇らねど、土用に入つたか八專か、額口に石臼が、二つ重ねてある様な、ア、、、鉦で切るやうな、濃茶が飲みたい事かな」と、戀し床しはなかりけり、水仕男いよ／＼可笑がり、「是々狂女その如く、戀し床しいばかりでは、猶し心が屈するぞ、そこらを拙者が浮かせん」と、もんさく袖をひるがへし、「抑堀江の町割は、醜の箱の薫を伽羅の香にしかへて、十方色里家建竝べ、二階座敷で引く三味線の、音はてんつるつる、天竺様の星の數をば、やれ讀みつくせ、星の數をば讀んだらば、濱の眞砂を衣に織れ、それを仕舞うてあるならば、いそ土器に柄を附けて、西の海をば漂へ出せ、とかく叶はぬ愛き世え、叶はぬ浮き世やつさ」、「只免に角に叶はぬは、可愛夫と可愛子が見まくほしさ」と、あらぬ門あらぬ扉に立寄りて、割れよ碎けと打叩き、憂き身くひさく袖涙、かゝる所へ親方は、下部等引連れ方々と、尋ね廻りて彼所へ來り、「是々太夫何事ぞ、さりとては見苦しい、急いで廊へ戻るべし、左程に夫子に逢ひたくば、何とぞ尋ねて逢はせん」と、様々賺せば、泉川涙をながし手を合はせ、「あら有難や貴やな、然らば早々歸るべし、さりながら、此分で廊へいんでは面白からじ、いざなう方

○お祓 お祓の練祭の略。大阪護社の寛祭には練物を出す。就中慶應社・天満宮等の御祓の練物は殊に盛んであつたもので、武者の假裝行列などがあつた。

○ほうど ほゞく。きつう。近松作「國性爺合戦」第二に和藤内はうゞくはを抜かし。

○ふれく 武者行列に供廻りの奴が、手振り袖へ槍など振つて威勢よく行く動作である。

○狂人狂へば不狂人も共に狂ふ 雷同する意の諺。「徒然草」第八十五段に「狂人のまねとて、大略を走らば則ち狂人なり」。

○葛結び 桶屋。桶職。「松訓菜」に「かづら桶にいふは際也、たがさもいへり」。

○佐渡屋町・越後町 共に大阪新町遊廓内の町名。

○みかの原 泉川 「憂き目を見」に「猿原」をいひかけて、「新古今集」卷十一、戀一の部、中納言兼備の歌、「みかの原湯きて流る、いづみ川いつみきとてか難しからむ」の上の句に據り、「いづみ川」に太夫の名の「泉川」をいひかけた。瓶原は山城國相樂郡の村名。

○扱取る 打掛のつまの開くを手でからゆる。

○あぢ 味。風流りな面白。

○東雲 夜明方に遊廓に行つて劇樂み遊女と逢ふ即ち朝込み(見索明)のことをいうたのである。

○末社 大盡傾城買ひの上巻と大神(たいじん)と其の番通へは、之に附隨する義で、附隨を末社といふ。

方お祓の眞似して、どつといぬまいか、但はいやか」と意地張れば、親方ほうどもてあつかひ、ハアア太夫がいふやうに、どうしてなりとも連れて來い、ヤレ逆らふな逆らふな」と、先に進めば泉川、ふれくそれよ、ふれく」と、狂人狂へば不狂人も、共に狂うて 歸りけり、げにや恩愛妹背ほど、世に捨て難きものはなし、扱も葛の丞末長は、漸う眼病本復し、彌彌彌太八を探出して討つべきに、さすが契りの深かりし女房に絆されて、もし大坂と立歸り、昔は正木葛の丞、今は身すぎの葛結び、是も憂き身の世渡りや、佐渡屋町と筋向ひ、越後町なる扇屋の、軒の日陰に片寄りて、桶の輪結うてゐる所へ、憂しや憂き目をみかの原、湧きて流る、泉川、引舟・禿・鵠老まで、全盛の君見よがしに、目立つ許りの揚屋入、姿扱取り來りしが、互にそれと見しや夢現の如く、氣上りて涙は胸にせき來れど、さすが人目を恥らへば、何ちなき風情にて、表の格子に腰を掛け、つつひに葛を結ふのをば、目と目で見るは初ぢやが、ム、あちなものかな」と、夫の顔をしげしげと、暫し惚れてゐたりしが、逢ふに東雲待つ宵の、さはりあるはかうした習ひかは、大盡小紅屋源十郎、末社替間に守護せられ、廊中をば鳴り渡り、響き渡

方お祓の眞似して、どつといぬまいか、但はいやか」と意地張れば、親方ほうどもてあつかひ、ハアア太夫がいふやうに、どうしてなりとも連れて來い、ヤレ逆らふな逆らふな」と、先に進めば泉川、ふれくそれよ、ふれく」と、狂人狂へば不狂人も、共に狂うて 歸りけり、げにや恩愛妹背ほど、世に捨て難きものはなし、扱も葛の丞末長は、漸う眼病本復し、彌彌彌太八を探出して討つべきに、さすが契りの深かりし女房に絆されて、もし大坂と立歸り、昔は正木葛の丞、今は身すぎの葛結び、是も憂き身の世渡りや、佐渡屋町と筋向ひ、越後町なる扇屋の、軒の日陰に片寄りて、桶の輪結うてゐる所へ、憂しや憂き目をみかの原、湧きて流る、泉川、引舟・禿・鵠老まで、全盛の君見よがしに、目立つ許りの揚屋入、姿扱取り來りしが、互にそれと見しや夢現の如く、氣上りて涙は胸にせき來れど、さすが人目を恥らへば、何ちなき風情にて、表の格子に腰を掛け、つつひに葛を結ふのをば、目と目で見るは初ぢやが、ム、あちなものかな」と、夫の顔をしげしげと、暫し惚れてゐたりしが、逢ふに東雲待つ宵の、さはりあるはかうした習ひかは、大盡小紅屋源十郎、末社替間に守護せられ、廊中をば鳴り渡り、響き渡

○上する女子（おこな） 掃屋の座敷の取廻しをする女仲居。

○座頭 盲人が髪を剃り、三味線を弾き唄を講つて酒宴の座敷を助けたもので、習問の一種である。

○とき〜 小足に急ぐさま。

○西から日が出る 未だ會て無いことの意にいふ語。

○くだ くだ〜しいこと。煩はしいこと。

○しな 折。場合。(既出)

○伽羅 奇南香を伽藍また伽南ともいふので、我が國語に音轉して「きやら」といふ。沈香に似たものである。

○かけ 缺。かけら。缺片。

○疾しや遅し 急いでもなほ遅い。

○神託 大妻を大神の意に取り、神の御告げと洒落たのである。

○泉 泉川の略。木長の妻が眞屋の太夫になつて泉川といふ。

○跡に心が引かされて 泉川は夫を案じ、跡に心が引かされて。

○よく ようもようも。

つて入込めば、主人夫婦上する女子、定附けの座頭の坊まで、とき〜とやがて表へ走り出で、「は、今日の御出での早いはどうした事、定めて西から日が出よ」と、いはせもはてず源十郎、「いかにも不審尤なり、扱何とやら改まり申すはくだなれど、此太夫殿御事は、突出の其日より、餘客にちよつともいらはせず、日毎に通ひ來る所に、心強い太夫殿、一度も首尾なる事はなし、所に過ぎし夜別れしな、明日はどうなりと、心任せとある故に、やら嬉しやと疾く起きて、焚く程に焚く程に、伽羅二かけといふ物を、大方焦げる程焚いて、疾しや遅しと來た事ぢや、皆よろこんでくれられよ」と、大盡神託ましますば、末社幫間は手を拍つて、「これは目出度い酒にせい、先づ此方へ」と奥座敷、泉ばかりは残し置く、跡に心が引かされて、行かぬも辛し、行くも憂し、暫しは佇みゐる所へ、入替り入替り、「はや御出で」とせづくにぞ、心ならずも入りにける、末長はるかに眺めやり、隠し涙にくれながら、「扱も是非なき有様や、京鎌倉にありし時は、一門一家の其外は、朋輩だに見せざりしに、思ひよらざる金故に、眼前見ながら人々の、慰物となしけること、よく天道にも見放され、武運に盡きたることかな」と、

○締木 毆で叩いて簀「たがし」を締める木片。
 ○すきと すつきりと。しつかり。近松作大經
 御昔曆に「毎年の事でもこちはすき」覺えぬ。

○まへがんな 前濱まへがんな。短矛の形を
 なし、桶腰の用ひるもの。「和漢三才圖會」卷二十四、
 百工具の部に「前鐮」連桶家用之、此亦有内刃外
 刃二種」であつて、圖を載せてある。ここの文は前
 鐮に「前方しをいひかく。

○桶 「桶」に「大おほ」けをいひかく。
 ○わ 「輪」に「わめく」をきかせた。

○かくは 「斯くは」に角刃をいひかけたか。
 ○突鉈 刀幅廣うて兩端に柄を附け、之を兩手に
 持ち、突出すやうにして木を削る鉈であつて、桶腰
 なごの使用するもの。「月」にいひかけた。

箱も締木も投棄て、吐息をついてゐる所に、座敷の首尾を見済して、そつと表
 の格子へ出で、「小春はまめで居まするか、お眼はすきとよござんすか」と言へば
 末長、客のあしらひを、よそながら見てむつとはする、商賣の道具によそへう成
 程小春はまへがんなの通りにて、桶の變りは少しも無い、たゞ母様が三日鎌ぢや
 と、泣きわではかりゐまするわ、子供はどうで正直な、鏡を見ては母様の、顔に
 私は似たげなと、其方に間の釘ちやと思ひ、底心から見て嬉しがる、父様が留守
 で淋しいに、内輪に居よとせがめども、細工に出ねば、口の輪が切る、程にと言
 ひければ、せん方もないことかなと、樽の口をえ明けもせぬ、今居る家も此頃か
 ら、かくはで借りは借つたれど、早此突鉈から、家賃濟さうわもない、此方は悲
 しい暮ちやが、そなたはよい身で羨ましい、床入前ぢやに、早う行て抱いて、締
 木で寝くされ」と、道具を投げてぞ泣き居たる、泉は涙のひまよりも、「御疑は
 御尤、さりながらわしが心は、誓文さうでなし、勤に出てから狂氣となり、長く
 引込み居る所に、不思議に本復致しまし、あの客に逢ひ初めて、昨日までも今日
 までも、つひに下紐打解けて、寝たこととは候はず、先程聞かせ給ふ如く、今

○物取り

盗人。ぬすびと。

○斬死

人と斬合つて其の場で死ぬること。

宵は是非との約束、もう差詰めに成りたれば、どうも遁れぬ所なり、只今死ねば
私も、貞女の道が立つぞとよ、中々今の心では、年期の間勤めうとは、ゆめ〜
存じ申さず」と、涙ながらに掻き口説く、末長悦び「さりとはけなげな、でかさ
れた、小春も七歳になりたれば、牛にも馬にも踏まれはせじ、思ひ切つたぞ、こ
なたへ」と、氷の如き前鱗、胸にあつるを禿が見て「なう悲しや」と逃げ入れば、
大盡・亭主を始めとし、家内残らず走り出で、矢來の如くに追取り巻き「それ打ち
殺せ、物取りよ」と、町中残らず馳せ集る、末長格子を小楯に取り、大手をひろ
げ「ヤア待た〜、御自分方が千萬人寄つても、手に入る者ではない、其上物
取盗人を致す者でも候はず、先づ一通りを聞いてたべ、某事は泉が夫、當時京
都の守護職たる、宇都宮彌三郎友綱が家臣、正木葛の丞末長といふ者、いさゝか
の事あつて、今浪人の身となる上、眼病故騙りにあひ、女房に勤めをさせ、無念
さの止む事なく、さるによつて女を殺し、ともかくもなりなんと、見らるゝ如く
この仕合、盗人でない言譯は斯くの通り、さあ〜女房これからは斬死なるぞ、
ぬかるな」と、斬つて出でんとする所へ、客源十郎走り出で「やれ方々卒爾すな、

○身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあり 身命を惜まないでこそ、難關を突破し安樂の地に到る事もあるとの意。「空也上人繪詞傳」卷上の歌に「山川の末に流るる穢殺(ごちがら)も、身をすて、こそ浮ぶ瀬もあれ」。「瀬も有り」を「龍磯海(ありそうむ)」にひかく。

○松竹 語に「松は千年、竹は萬年」といふによつて、以て幾久しいこといふ。

第 四 (伏屋・泉川道 行。池田の宿)

登場人物の主なる者

様子があるぞ、棒を引け、何れも鎮まれ〜」と、扱末長に打向ひ、「扱は正木萬の丞末長殿にてましますか、拙者は殿様の吳服所を承る、小紅屋淨春が悴、源十郎と申す者、當地の店に幼少より罷在候へば、未だ御目見え仕らず、親にて候淨春、一年殿様の御機嫌背き、吳服所を召上げられ、難儀に及び候所に、御自分様の御蔭を以て、御前の首尾能く罷成り、再び御用を勤むる事、偏に貴公様の御蔭と、一家悦び奉る、かやうの時こそ、御高恩を報じ申さん時節なれ、御内儀様の御事は、只今身請を仕り、事なく添はせ奉らん、先づ〜此方へ此方へ」と、奥へ伴ひ奉れば、主も悦び、「御杯それ御銚子よ島臺よ」と、上下の、めき壽の、其品々を調ふる、げに頼みある世の中は、身を棄て、こそ、浮ぶ瀬もあり磯海の、深き縁起をも經ぬべし、松竹の變らぬ色こそ目出度けれ、

伏屋 (宇都宮友綱の室) 文車兩輪の介道逸 (友綱の忠臣) 正木葛の丞末長 (浪人)

末長の妻子 宇都宮彌三郎友綱 (元京都守護職)

熊野比丘尼二人

長 (池田宿旅舎の主人) 塵塚無量の介土塊 (友綱の逆臣)

彌太 八 (惡漢)

其の他大勢

概

伏屋は、都の内は敵の目を忍ぶ爲に男姿に扮し、長刀を佩き男笠を被り、文車を伴なひ東路をさして旅に出た。其の途中で末長が妻子を連れて旅してゐるに邂逅し、相共に連立つて、道の邊に咲く秋草を手折つて興じつつ、二川・白須賀を越え、遠州濱松に著いた。

宇都宮友綱は神宮寺に隠れて文車を待つてゐたが、敵に追撃されて遁れ、暗峠を越えて大和路を經、鎌倉へと志した。道中旅費に窮し、旅する二人の熊野比丘尼を呼留めて之を賺し、池田の宿の長を欺いて比丘尼を其の旅舎に泊らせ、長から錢三貫文を騙り取つて逃げ、長の追手の者等に搦められた。折節伏屋の一行が通りかかつて此の有様を見、「これは」と驚き、長に黄金百兩を與へ、騒ぎを鎮めて友綱を取戻した。末長は友綱から勘當を赦され、互に無事であつたことを喜んで皆長の旅舎に泊る。其の夜更けて、斯くとは知らぬ塵塚は、近侍の者等に守護されて來り、これも長の旅舎に泊つた。之を知つた友綱主従は、塵塚を打つに時こそよければと、窃に旅舎を忍び出た。折から計らずも驛馬に乗つて來る彌太八に邂逅し、直ちに之を斬棄てて末長の遺恨を晴らした。次いで其の馬を足場として塀を乗越え、塵塚の寢所に亂入して之を搦め捕つた。

◎戀に焦れて：起きかねた枕：茶飲み時 當時の流行唄「茶飲み時」の唄に據つたのである。

○賤しきに：宿るまじや 若しも月影が、下賤であるからとて嫌ひ、富貴であるからとて愛するといふやうに、情愛に差別を附けるものであつたら、賤が伏屋に月影は賤つて宿るまいよ。月影にはさやうな差別がないから、總て平等に照らすの意。「伏屋」は、地に伏したやうな低い賤屋をいふ。唄歌に「賤が伏屋に月もさす云々」。

○我 伏屋のこと。

○玉の輿 諺に「女は氏なうて玉の輿に乗る」。

○力草 「相撲草草」ともいひ、路上などに自生する一年生草本で、莖の長さ一尺許に達し、強靱なるによつて力草といふ。葉は細長く平行脈を有して互生し、夏季穂を出し、花は花莖の頂に複穂状花序をなして數個集る。ここの文は、言葉を力としての意に、「富の葉草」「力草」を草をかきね「忍ぶ草」といひつづけて文を飾つた。

○忍ぶ草 忍ぶ隠れ家の意に、忍草生ふ隠家をいひかけた。忍草はあをねかづら科の羊齒類で、山谷の土石上に自生し、また夏時の觀賞用として吊栽される。

○女とは見えす男 在原業平の故事に據つた文で、露曲、井筒にも「女とも見えす男なりけり業平の面影」とある。

第四 ふせやいづみ川道行

戀に焦がれて行く道なれど、夢が惜しさに、ナ起きかねた枕、今暫しぞや、また寝の床々には濡る、は袖、東が白む、ドン響て賤屋の、茶飲み時、月清淨と影残り、景色もよしやく、それ古き詞の、賤しきに情隔つるものならば、賤が伏屋に月影は、宿るまじやと詠みけるが、我も賤しき者なれど、殿御に添へばその光、玉の輿にも乗りし身と、心一つに明け暮れと、二つ枕の起き臥しも、私言盡せぬ嬉しさと、祝ひつ又は壽きつ、樂しみ深く契りしに、無理な戀路に隔てられ、危かりつる身の難儀、神徳まさきに有難や、不思議に命助かりて、安穩ならしめ給ふ故、夫の行方を尋ねんと、めぐりゝて文車が、風の便に聞き出す、言の葉草の力草、忍ぶ草なる隠れ家を、出でつ、行けば東路や、都は敵なりければ、せめて一日か二日路は、姿を變へて行かなんと、兩輪の介は草履取、我は目に立つ形姿、女とは見えす男模様の染衣を、しやんと羽織りて長刀、さすがは我が心さ

○なりも形も男…さつても男はよいもの
 當時の謡歌に據つたものである。「松の落葉」(元祿十七年刊卷五、薩權三男踊に「そりや〜そりや〜、槍の權三ははずはに御座る、谷のやつとんと笹やで、やあ、そらへにかゝる、しなへてかゝる、どうでも權三は濡着た、油壺から出す様な男、しつさんそりりに見舞られる男、磯の千鳥を追おつし掛けて、石突纏んですんずと伸ばしやる〜、さあさえいさつさ〜、えいさつさ〜、さつささうでも權三はよつとつにちよい男へ」。

○はすは 運葉、浮氣の意。

○道の邊の…立寄りて 「新古今集卷三三、夏の部、西行法師の歌に、道のべに清水流る、柳陰、しほごとこそそたごまりつれ」。

○すするなる目 めつさうな事。伏屋が男装してめつさうな目。

○花戦 花で撃ち合ふ遊戯をいひ、以て花の散ることにいうたのであらう。

○火繩 槍肌又は竹幹の肉を叩き碎き、或は木綿糸を捻つて繩を作り、これに硝石を吸收させたもので、之に火を點じ置いて、煙草を喫する時などの用に供する。

○内儀 人の妻を呼ぶ稱。内方。末長の妻をさす。

○娘 小妻をさす。

傾城八花がた

へ、あらぬ姿を恥かしく、俛隠す男笠、深くぞ忍ぶ許りなる、道慰みと戯れて、「來いよ丁稚」と振返り、杖持たせしを携へて、「なりも形も男でござるヤットン、色のヤットン 最中で、ヤなさけも有つてはすはに見えて、どうでも男のなりぶりぢや、足の運びも品よや姿ヤットン、とろりと見惚れる姿、いかな女中も見戻りて、小棲を執へてすんずと引かしやる〜、サアよいさつさ、よいさ〜よいさつさ、さつても男はよいもの」と、かたり詠みける。道の邊の清水流る、柳陰、暫しとてこそ立寄りて、笠も刀もかいやれば、すゞろなる目もたすかりて、心も軽く身も軽く、名所古蹟はそこ〜に、たゞ風景と見も慣れぬ、花戦の色に愛で、休みがてらに腰掛けて、惱みを助けおはします所へ、これも旅出立、二十歳あまりの女房の、火繩片手に立寄りて、「御無心ながら、少しの間其火を貸して」といひけるに、兩輪の介氣を附けて、よく〜見れば、「これはさて御内儀なるか」、「文車殿、さて〜不思議」と、連合にかくと語れば、末長も驚き、彼所へ打寄りて、互の事ども語り合ひ、「萬の事は道すがら申し合はさん、此方へ」と、打連れ行けば女房も、「奥様此方へ〜」と、娘交りに行く道の、野路も山路も里々も、

○紫蘭 草の名。夏月莖を生じ、三四葉互生す、葉は縦に皺が多い、莖の先に筒に似て紅紫色の數花を開く。

○笠に挿すてふ 花笠の縁によつていふ。

○僧正遍昭の我落ちにき 「古今集卷四、秋上郎、僧正遍昭の歌に「名にめでて折れるはかりぞ女郎花、わね落ちに、き人に語るな。一首の意は女郎花といふからに其の名なつかしく、心さまりて手折つたばかりの事なぞ。されは女郎花よ、我が女郎の罪に落ちた人に降すなさいふのである。

○勤の草 女郎花というて勤の女、女郎の名のつく草。

○曉の明星 刀もない物を 能狂言、小舞の小唄に、「曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろりくさする時は、扇おつ取り刀さいて、太刀の柄に手打掛けて、往なうよ戻らうよ、いうては袂に取附いた、往なうよ戻らうよ、何ともそなたの御計らひさ、いうては小腰にたきついた、いとしにはきりんなう、きりんなう、限りんなうきりんなう」。

○二川 三河國美濃にあつて吉田と白須賀との間、東海道五十三次の一。

○白須賀 遠江國濱名郡にあつて二川と新居との間、東海道五十三次の一。

○濱松 天龍川と濱名湖との中間に位し、東海道五十三次の一。現今は濱松市と稱し、工業都市として榮え、人口十二萬ある。

心のまゝに眺むれば、旅珍しくも面白く、野菊紫蘭を爪折りて、笠に挿すてふ女郎花、露を含みて立ちたるは、誠に僧正遍昭の、我落ちにきとあそばせし、歌の餘情と思へば、そゞろに昔しのばしく眺めかへすも、名に愛でてをれるばかりぞ女郎花、「汝も勤めの草ならば、我身二人にあやかれ」と、教へつ語り慰みつ、憂さを忘るゝ旅枕、ア、起きしなの切なさは、戀せぬ身にもあるぞかし、曉の明星が、西へちろり、東へちろり、ちろりくとする時に、扇おつとり刀さいて、太刀の下緒に手打ちかけて、行かうよ急がうよと、いうては小腰に抱附いた、いとしかやきりりんない、きりりんきりりんか、きりりんないても刀もない物を、ア、うつゝなのわが姿や、浮かれし心を何とせうぞよ、何とせうぞよ、なう出でて行く行く、主は出でて行く、我は後れて小手招き、招く袂にすれて行く、野分の木の葉ばら〜、ちらり〜と雲の根を、行けど落葉は遠からじ、ア、我々は又、何時か逢瀬はぬ瀬二川も、白須賀越えて遠江、濱松が邊に、著きにけり、かくて友綱過ぎし頃、勝間の里の夜討がけ、諸家中一味してける故、思ひの外に仕損じて、神宮寺まで立退かんと、兩輪の介を待つ所に、すかさず敵おつかけて、

○暗や峠 「暗くらがり」りに「暗峠をいひかけた。暗峠は大和と河内との國境で生駒山の南麓に當り、生駒山の山路辻子越の南なる峠である。近代奈良・大阪間の通路は専らこれによつた。

○熊野比丘尼 手甲をかけ比丘尼の姿になつて、熊野権現の事編れめに事をしてゐたのが、時勢の推移につれて隠し白粉薄紅を附けて伊達な姿になり、歌念佛又は流行節を誦ひ、小唄を便りに色を賣る尼となつた。熊野牛土の誓紙などはこの比丘尼の賣り配つたものである。

○鼻唄 鼻にかかつた傷癩で小唄なごを誦すこと。

○ござめれ 「こそあるめれ」の約。

○しやな／＼ しなやかな歩み振をいふ。近松作「姫寄かるた」に、「それをしるべといひ捨て、しやな／＼ふりてぞ歸りける」。

○事 自分。貴方の意に「御事」といふ。

○三本松・さる原 遠江にあるか。蓋し野中の三本松や、哀猿叫ぶ原の意であらう。

○旅は道連れ世は情 旅は道連れあるが心たのもしく、世渡りは人情にたよる外ないこの意の露。この露は東海道名所記「なご」にも見えてゐる。

○札 守札。

既に危く見えける故、草に葉隠れ松の陰、傳ひ／＼て暗や、峠を越えて大和路に、

旅宿を求め養生し、やう／＼本復してければ、又鎌倉へと志す、土屋。岡崎・

土肥・三浦、一門親しき中なれば、これを便りに下りつゝ、是非の安否を極めん

と、旅泊を忍び出でけるが、もとより覺悟なき旅の、路錢殆んど事絶えて、暫く

休み居る所へ、熊野比丘尼の二人連、鼻唄歌うて通りしを、友綱よきものござめ

れと、つゞいて立てば、飛退いて、「ア、怖、こゝな人わいの、あつたら臆を潰

した」と、しやな／＼行くを呼戻し、「コレ／＼怖いことはない、シテそなた衆は

夜に入つて、何處まで通る人なるぞ、見給ふ如く此事も、連れなき一人旅なれば、

連れにならう」といひければ、「いや／＼連れはいりませぬ、わし等は修行がてら

にと志し、参りますわ」と行きけるを、又呼戻し、「比丘尼達、これから二里半

程行けば、三本松・さる原とて、辻切どもの住所なり、其上此さる原といふ所は、

熊・狼が大分あり、たび／＼人を食ふよし、跡の宿にて承る、旅は道連れ世は

情、いづれも方は修行の旅、貴い御札も候はん、此難遁れて通りたし」と、誠し

やかに嚇すれば、二人の比丘尼興覺めて、「扱は左様に候か、夜道を行くは今が初、

○ひよん 凶な意にいふ。わるいこと。いみきらふべきこと。新井若美の謡に、「俗に物の不好事を凡てひよんな事と云、凶字の華音ひよんと云ふよりいひ傳へて電語となれり」。

○鐵輪 じごく。鼎坐。

○おどく おづく(柿ヶ)の種。

○池田の宿 遠江國磐田郡にあつて、今は池田村といふ。天龍川の東岸に當り、東海道の新驛であつたが、今は衰ふ。賴朝時代の池田の宿は天龍川の西岸にあつた。その昔の宿は今では河底となつたやうである。

○本陣 往時大小名其の偉武家の公用旅舎を本陣と稱した。

○綿帽子 真綿を摘みひろひて作り、多くは年増女の被つたもの。「賤のをた巻」に、「昔は女の帽子といふものを被りたて歩行たり、綿帽子は年季三四十已上の町のかぶるものにして、若き女は白に紅のうらを付て被りたり」。

○はした 鳩。雜役に使はれる身分卑しい女。

殊更はじめて通る道、怖いといふは大抵の事かいの、狼や盗人に御札がなんの利きませう、白須賀に泊つたらば、この氣遣ひはないものを、ひよんな事をばしました」と、三人鐵輪に立竝び、おどく震うて居たりけり、友綱大方仕濟したと、心の内にうなづき、「これく二人の比丘尼達、幸ひ泊る所あり、是より一里程行けば、池田の宿の長と申す、御大名衆の本陣あり、何卒これまで同道し、詫びて宿をば借るべきが、いかにとしても比丘尼では、中々合點致すまい、何と二人の頭をば、比丘尼と見せぬ思ひ付、どうぞないか」といひければ、二人の比丘尼は、どうがなして宿は借りたし、怖うはあり、綿帽子をば取出し、「是さへ被けば、比丘尼とは中々見せは致さじ」と、てんでに被いて立つ姿、友綱熟打眺め、「ラウく是々よき女中、扱これからは某に萬事を任せられ、此方へ」打連れてこそ急ぎけれ、扱友綱は、二人の比丘尼を先に立て、長が邸へつくと入りて亭主亭主と呼びければ、はつと「此方へ」と立出づる、友綱主に向ひ、「是は鎌倉梶原殿へ召抱へらる女中方、上が十人下五十人、以上男女六十人、夜朝旅籠念を入れ、御馳走を申さるべし、これなる二人のおはした衆は、駕籠に酔うたる人々な

○乗掛 江戸時代、宿禰の駄馬に荷物二十貫目
を附け、その上に一人乗ること。

○茶の間端は拾ひ駕籠 食事場を助め、又
雜役に使はれる女中は、拾ひ駕籠に乗つて来る。

○たも 「たまはれの約」。

○算用合ひ 計算すること。算用。近松作「心
中天の細鳴」に「最前の銀で、其方の算用合も仕舞」。

○舌も引かぬ 言ふ言葉も終らぬ。またしやべ
つてゐる。近松作「平家女護局」に「中宮の御身に慥
我のあつた時、能登の守政經と申す弓取、愚痴文盲
のお名が流れん笑止々々々、舌も引かぬに六波羅よ
り早使」。

り、先づ休ませて給はれ」と、二人は奥へ通しけり、「扱十一人御乗掛、以上三十駄、
茶の間・端は拾ひ駕籠、宿境迄借つたれば、あれにて駕籠錢拂ふ筈、先づ〱錢
を三貫たも、某は錢拂ひ、津山平三と申す者、算用合ひは後程せん、早う〱」
といひければ、主は何の心も附かず、錢を渡せば、引かたげ、いづちともなく失
せてけり、主は表に火をともし、待てど暮せど音もせず、「ハテ扱是は遅いこと、
如何にとしても吞込まず、それ〱先刻の女中方に、様子を問へ」といひければ、
若き者共立出でて、「申し二人の女中方を、起しに參り見ますれば、兩人ともに、
眞青な坊主頭の剃りたて」と、舌もひかぬに、「騙りなり、それ〱先刻の男奴も、
未だ遠くへは行くまいぞ、ぬかるな、人を走らせよ」と、大勢前後に引分れ、跡
を慕うて追駈け行く、後には主、比丘尼を括り、詮議最中なる所に、友綱公には
數十人、蟻の如くに群り附き、長が表へ引戻し、「御代官所へ引くべきや、但し是
にて斬るべきか」と、皆口々に罵り合ふ、折節文車兩輪の介、伏屋の御供申しつ
つ、末長親子三人共、思はず彼所へ行きかゝり、見れば若君「こはいかに」と、
前後の人を拂ひ退け、末長主に打向ひ、「騒ぎまするな、已等は折悪しければ名乗

○上品事情。仔細。

○いはしみづ「言はずしを」石清水にいひかけ、石清水の縁下底さいひつづけた。

はせぬ、仔細ある御方ぞ、はた又盗人騙りとは、定めて様子しなあらん、萬事のりと聞届け、失せ物あらば辨へん、是は今宵の騒動料、何れも沙汰を致すな」と、黄金百兩主に取らせ、即時に騒ぎを鎮めぬる、頓智の程こそゆゝしけれ、文車末長謹んで御前に畏まり、「先づ以て御堅固の御有様、悦び存じ奉る」と、段語り奉れば、伏屋はとかうをいは清水、底の心の戀しさは、よみ盡されぬ事許りにて、涙にくれておはします、中にも末長、「私儀不慮に御勘氣蒙りて、さまざま難儀仕る、折しも呉服所小紅屋が様子聞附け、かくまへて命を繋ぎ罷在り、あはれ扱御勘氣を御赦し成され下されなば、よに有難う候はん」と、涙にくれてぞ居たりける、友綱顔色麗しく、「先づは久しい葛の丞、御事が諫め用ひずして、かゝる仕合はせ面目なし、向後愈頼むなり、扱文車を命を捨て、伏屋を奪ひ返す段、又類ひなき働き、近頃嬉しう思ふなり、再び世にだに出でたらば、主と二人の比丘尼には、一禮を相述べし、今宵は是に一宿し、明けなば申合はさん」と、打連れ奥へ入り給へば、主は思はぬ富に逢ひ、上下ささめき悦びて、さまざまもてなし奉る所に、夜更け人しづまり、表の門を切りに叩き、「京都の御守護塵

○關札 本陣の宿大名などの宿泊する旅館に、何官職何某殿御泊なご、止宿する旅人の姓名などを記した立札をいひ、其の形關所の制札に似てゐるよりの稱。近松作「關山紀」に「輝光の關札引披いて、清原の右大將殿御泊と高々押し立て」。

○こたふれば 申述べれば。

○内證 勝手むき。裏所の方面。

○足代 あしぢ あしがかり。あしは。

○究竟 至極の義。都合よきこと。

塚殿の御通り、事火急なる御用あり、俄に發足まします故、御關札は無けれども、今宵はこれが御泊りなるぞ」とこたふれば、亭主は周章てふためきて、廳て表へ走り出でて、提燈立てさせ、乾砂帚目入れてぞ待ち居たる、遙にあつて塵塚は、近習の諸武士に守護せられ、奥の亭にぞ入りにける、人々未だ目も合はず、始終を篤と聞きすまし、天の興へと悦びて、忍びくりに表へ出で、友綱仰せ出さる、は、誠に以て嬉しくも、主従不思議に廻り逢ひ、是に一宿致す所に、思はず敵に逢ふ事は、偏へに武運の盡きざる所、かたぐい以て満足せり、扱内證より斬込んでは案内知らず、過ちあらん、所詮表の塀を越し、玄關の戸を切つて落し、泊り番の奴原が、寢惚れたるを討つて捨て、即時に奥へ斬込まん、然し高塀越すべきに、足代無くては乘られまじ、ハテ何とせん方々」と、立煩うて居る所へ、何かは知らず乗かけに、手提燈をば自ら下げ、半ば夢見て來る者あり、「是究竟の足代、それ〱乗手斬つて落し、其馬とれ」とやり過し、末長火影を背けつゝ、能く〱見れば彌太八なり、「コハ佛神の御加護か、日頃の本望今こそ」と、馬より下へ引下し、取つて伏すれば、馬方は「やれ追剝よ、盗人よ」と呼ばはり、逃げんとす

○張り 平手で殿打し。

○傳馬 宿つぎの馬。

○蝦錠 鰯様の海老形に曲つた錠で、門の扉・貫木におろす。

○福徳の三年目 福徳神は三年目にその神の憑みがめぐり来るといふ。以て好運に際會する意にいふ流。

○四段目 本曲の第四段目。

○正木の葛末長 正木葛の丞末長に、正木葛は常緑でいつまでも變らず末長をいひかけた。正木葛は「つるまき」ごもいひ、常緑の葛である。(同名の葛は冬の初めに紅葉するものがあるが、それとは別)。近松作「鎌田兵衛名所盛」に「常緑堅碧の正木のかげ、翠天す盡きせす萬々年」とある。

○主従の三世 主従は三世の契といふ。「奇縁」といへるは、邂逅したのも不思議の縁との意。

る所を、文車すかさず追詰めて、膝の下に押つひしぎ、首引抜いて捨てたりけり、又末長は悦びの涙を流し、面を張り、やれうぬめ故、不便なる女房までに苦勞をさせ、無念さ又は口惜しさ、廻り逢ひなば頬げたを、引裂き捨てんと思ひしに、嬉しの今日や今宵や」と、につこと笑うて、首掻落し、悦び勇みて立つひまに、文車傳馬の背を傳ひ、難なく高塀跳ね越えて、貫木蝦錠もぎ放し、門を開けば、友綱公主従、争ひ駈込んで、三人一處に押竝び、扉に手をかけ聲をかけ、えいやえいやと押破り、面も振らず斬込めば、「すは夜討よ」といふ程こそあれ、狼狽へ廻る所をば、腕を限りに斬まくり、三人諸共手も負はず、無量の介を引括り、勇み進んで出で給へば、末長女房親子共、伏屋の御供申しつゝ、急ぎ表に立出づれば、末長悦び、「女ども今日は如何なる吉日ぞや、主君に廻り逢ふといひ、憎しと思ふ彌太八めは、思ひのまゝに打殺す、是福徳の三年目」四段目にて敵を討ち、治むる末は御祝言、目出度かりける源氏の御代、正木の葛末長に、相竝びたる兩輪の介、榮ゆる家と成りけるは、心底變らぬ主従の、三世の奇縁盡きせざる、印なりとぞ感じける、

第五 (頼朝館、堀川城内)

登場人物の主な者

塵塚無量の介土境(友綱の逆臣)

宇都宮彌三郎友綱(京都守護職)

源

頼

朝(鎌倉將軍)

歌舞伎役者。其他大勢

梗概

塵塚無量の介が、主家を横領して驕奢を極めたのも束の間であつた。彼は池田の宿で宇都宮友綱に擲められて鎌倉に引渡され、頼朝の御前で斬罪に處せられ、首を由比が濱に晒された。そして友綱は再び京都守護職に任せられ、堀川の城に入り、祝ひの宴賑はしく、歌舞伎役者を招いて「信田妻」の第三(信田の森の白狐が美女に化け、安倍保名と契つて安倍晴明を産んだ。其の後蘭菊に氣を引かれながら姿を消した)の芝居を演じ、上下喜びに満ちた。

總評

構想作文の上から見て、我等は錦文流の作に於て、卓越した何物をも認め得られぬを遺憾とする。

第五

○正しからざる不義、禍の仲立 「左傳」昭公元年の條「不義而強、其斃必速」。

○左傳「春秋左氏傳」の時。

さる間、正しからざる不義の富は、却つて禍の仲立と、左傳に書けるが如くに

○由比が濱 相州鎌倉海岸で、今は海水浴場となる。

○院參 上社の御所に紙候すること。

○堀川 京都二條難宮の東側を南北に通じてゐる川で、それに沿へる大通りを堀川通りといふ。

○門前市をなす 來訪者の甚だ多きをいふ。

『平家物語』卷二に「顯貴群衆して門前市をなす」。

○亥の子の壽 十月亥の日を「亥の子」といひ、北斗の斗柄が亥に向ふといふによつてこの稱がある。

上の亥の日の亥の刻に餅を食ふ時は萬病を除くといひ、其の説をなす。

○ののめく 聲高に騒ぐ。

○歌舞伎子 歌舞伎役者、特に若衆少年俳優。

○葛の葉の恨みても 信田の森の草隠れに入りて姿はなかりけり 古淨瑠璃「信田妻」第二文の改作で、安倍の童子の仇葛の葉が、信田の森の白狐であつたとの傳説による。

○葛の葉のうらみ 古淨瑠璃「信田妻」の歌に「戀しくは尋ね来て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」。

○苦海 昔の際限なく多き現世を、大海の際涯なきに喩へといふ。

○人ならぬ身 信田森の白狐なればかくいひ、安倍保名と契つて安倍の童子を生じ。

○安倍の童子 安倍晴明をいひ、花山天皇の頃ゐるた有名な天文博士。

○害心 殘害の心。

て、塵塚一旦上をかすめ、友綱を追ひ失ひ、家富み榮えたりけれども、天道是を赦し給はず、又友綱に捕はれて、憂き鎌倉へ引渡され、頼朝公の御前にて首を刎ねられ、由比が濱に晒され、友綱再び運を開き、花の都の守護職に、又あらたむる參内、且院參までを相勤め、堀川の城に入り給へば、彼方の御使者、此方の悦び、門前晝夜市をなし、外繫の駒嘶かぬ間こそなかりけれ、時しも、亥子の壽は御奥方」との、めきて、歌舞伎子どもを召寄せられ、風流姿を盡せしは、今様にこそ、見えにけれ、葛の葉の、恨みてもなほ甲斐ぞなき、憂き世の中や身の果や、又の苦海に歸りぬる、人ならぬ身を哀れなる、妹背の道と恩愛の、道のちまたのまん中の、なかに立ちたる哀れさは、安倍の童子が母が身に、積りくゝて留まらぬ、さればにやもとよりも、其身は畜生害心の、苦しみ深き身の上に、憂かりし事を重ねつゝ、思ひの種や槓の戸の、明くるわびしき葛城の、夜の臥所に幼な子が、母や慕ひてさぞかしと、涙はさらに止まらず、頃しも今は秋ざれや、稻葉そよぎて露こぼす、千草の雨に裾濡れて、姿搔取る身の振りは、萩を潜りつ、薄を避けつ、犬の臥居も廻れば遠し、何のまゝと飛越えて、しやんと立ちたる 俣

○信田の森 大阪府東北郡信太森神社（又は葛の葉社）は巨楠樹下の小祠であるが、參詣する者が甚だ多い。

○心空 十行の丸本に「しんかう」とある。

○狐福 思ひがけぬ福徳。意外のまうけもの。「大矢敷」四に花の山様子垂れる狐福、二年が内に黄金山吹。

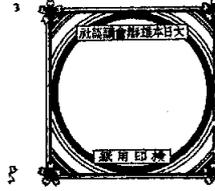
様々手を碎き、身をもがき、術を盡せど掛らばこそ、反つて繻におし入りて、跡を見返り嬉しげに、信田の森の草がくれに、入りて姿は無かりけり、誠に神使神道の、自在を得たる白狐の神、心空無我の門に入り、壽福圓滿如意成就、狐福とて、今このこの樂しき宿に賑ひて、

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義ノミト眞叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豐島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六三〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番
五〇〇番

(本製地海天)